

成瀬記念館

2013



N^o.28

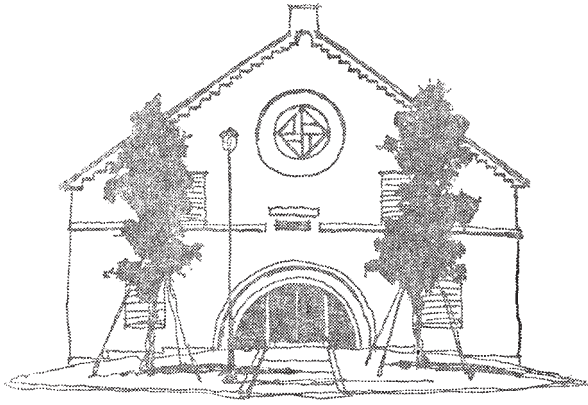
日本女子大学成瀬記念館



精神的律動の諧和を表す絵

成瀬仁蔵の依頼により柳敬助が本の挿絵を模写したもの

(本文 26 ページ参照)



成瀬記念館 2013

No. 28

目次

口絵

理学部開設20周年記念展―目白の理系女子物語リケジヨ

参考図版

巻頭言

成瀬仁蔵先生に立ち返りつつ、前を向く…佐藤 和人…4

随想

上代先生のご遺品整理……………松本 晴子…6

理学部開設二〇周年に思う……………今市 涼子…9

女子大の森の保全について……………関口 文彦…12

日本女子大学の一貫教育における実践的平和教育

〜小笠原サマースクール〜……………生野 聡…15

研究ノート

成瀬仁蔵の実践倫理にみる神智学……………大森 秀子…18

未発表資料 32

成瀬仁蔵講話Ⅰ 大学部全体の為に

―明治四十四年三月二十二日―……………31

研究ノート

「軽井沢山上の生活」の詩について―

原詩を尋ねて―(上)……………片桐 芳雄…62

成瀬記念館 二〇一二年度活動の記録……………63

二〇一二年度展示の記録……………68

表紙題字・成瀬の文字は創立者の自署 カット・江口まひろ

成瀬仁蔵先生に立ち返りつつ、前を向く

日本女子大学学長
成瀬記念館館長

佐藤和人

本年四月から学長を務めることになりました。本学の創立者、成瀬仁蔵先生（以下敬称略）の建学の精神、教育目的、教育理念など、些かも古びることなく現代に生き続けていることに感動を新たにしています。成瀬仁蔵の生き様から私達は多くのことを学んできましたが、いまだその水脈は枯れることなく、くみ尽くすことはないように感じられます。私達は成瀬仁蔵に立ち返り、確認しながら、しかし前を向いて、現代に生きる女子の新たな教育を推進していきたいと思っています。成瀬記念館はそのための重要な基地といえるでしょう。

「自ら判断し、自ら決定し、自ら実行する力を身につけ、社会に貢献できる人物を養成する」という自学自動主義は重要な指針のひとつです。大学教育とは既に完成した人物を世に送り出すことではなく、自ら成長し完成させていく力を持ち、その方法を知っている人材を世に送り出すことであると成瀬仁蔵は述べていますが、表層的な技能や知識ではなく、まさに生きるための基礎となる力（地力）をつけるのが本学の教育だと思えます。幾多の問題を抱え混沌とした現代社会において、いろいろな課題に果敢に取り組み意欲をもつ地力を備えた多様な学生を輩出してこそ、社会貢献が可能になるのではないでしょう。女子総合大学である本学はその使命を果たすことができると確信しています。

成瀬仁蔵の出身地である山口（長州）と私の故郷である鹿児島（薩摩）は浅からぬ縁があります。日本の新しい夜明けである明治維新への原動力のひとつが幕末の薩長連合です。一八六六（慶応二）

年に薩長同盟を結ぶにあたり、京都の薩摩藩屋敷（現在の同志社大学あたり）において幕府の目を盗むために、「琵琶会」と称して倒幕の志士たちが集まって計画を進めたと伝えられています。薩摩琵琶は戦国時代に鹿児島で大きく改良され、薩摩藩武士教育の二本柱として現流剣術と薩摩琵琶があげられるほどです。一八五八（安政五）年生まれの成瀬仁蔵は薩長同盟が結ばれた時に八歳で、吉敷郷校憲章館に在学中です。長州の代表者であった木戸孝允（桂小五郎）をどのように感じていたのか興味あるところです。木戸孝允が没した一八七七（明治一〇）年に成瀬仁蔵は澤山保羅の感化でキリスト教に傾倒し、郷里を出立しているので直接的な二人の接触はなかったかもしれませんが、新たな時代の幕を開けた故郷の先達に影響を受けた可能性は高いのではないのでしょうか。

創立当時と比べ時代背景は大きく変わりましたが、成瀬仁蔵の掲げた教育への情熱は色褪せることなく現代に生き続けています。本学は「女子も教育する大学」ではなく、「女子を教育する大学」です。私達は創立以来の根底にある熱き思いを共有して、そこに学ぶ者が学びを通して自己を成長させ、社会に貢献するための礎を築くことができるように努めたいと考えます。

二〇一三年五月

上代先生のご遺品整理

松本 晴子

晩年の上代先生にお目にかかったのは、ニューヨーク生活三年半を終えて帰国した直後のことだった。一九七八（昭和五三）年、婦人国際平和自由連盟（WILPF）では、三年毎に開催される国際大会を日本支部主催で行なうことになり、その準備計画で支部は大童だった。当時上代先生はこの会の名誉会長を務めておられた。

桜楓会ニューヨーク支部の会台でお目にかかった大先輩、石渡ミナ様（二二英）に呼び出され、この大会の手伝いをするようにとのことで、この会の企画部長をしておられた北

野美枝子氏（図書館友の会*初代常任理事）に紹介された。会場の案内などの雑役なら、とお引き受けしたものの、新聞を大会開催中の一週間発行するように、と言われ、何の経験もない者にとっては晴天の霹靂。

とはいえ上代先生の秘書役として先生の傍でお世話したことのある、学習院大学出身の方が新聞制作の経験者で、その方に従えばよい、とのこととで恐る恐る承諾したお役目だった。ところがその方が開会目前にご病気に罹られ、入院という大椿事（私にとってもこの会にとっても）が発生。何人かの同級生（四八英+新二英）に助けを乞い、職場から夏期休暇をとって駆け付けてくれた友人たちに、感謝するばかりだった。そして、大会中に何度か、杖について歩いておられる上代先生にお目にかかる機会が得られた。

無事に閉会し、報告書を提出し、

各部から提出されたものを纏める仕事に取掛かろうとした矢先、夫がロシア（当時はソ連）のハバロフスクに転勤となり、最後の締め括りはすべて皆様に押しつけて日本を出る事態となってしまう。三年後の一九八一（昭和五六）年に帰国して間もなく、図書館友の会の事務局にお手伝いに通うことになった。当時すでに入院を繰り返しておられた上代先生もご気分の勝れた時には友の会の役員会や総会などにご出席になられ、ご健在を喜びあつたものだった。

そして一九八二年四月、日本女子大学第六代学長上代タノ先生はご永眠になった。

お通夜の宵、学校関係、友の会関係、WILPF関係など多くの方々や先生のご遺宅、新宿御苑を望むマンションにびっしりと馳せ集まり、お台所では食物学科元教授らが揚げ物など慣れた手つきで準備され、慣

れないお手伝いの私ども若者も立ち働いたことなど思い出す。参会者全員が心をこめて唄った何曲もの賛美歌のことを今でもはっきり覚えてい

る。先生はご住居その他を本学に遺贈されたそうで、ご遺宅の蔵書は図書館が整理して学校に移すことになり、その一環としてリスト作成が友の会に依頼された。友の会事務局の藤岡恵實子氏が和書を、松本晴子が洋書を担当することになった。兩名とも司書の資格（私は MA in LS）を取得していたことで、一応こうした作業が初めてではなかったとはいえ、思いもかけないことだった。出来上がったリストの表書に「作成期間 1982.4.21～5.13」と記してあることから、ご他界後間もなくご遺宅に伺ったようである。当時の図書館事務主任山口武義氏に連れられ、自前のポータブル・タイプライターを携え

ての出張だった。多分一週間に二、三度通ったのではないかと、思い起こしている。

先生のご最期まで家政婦を務めた方がまだご遺宅を守っていらして、お昼をご馳走になったり、先生がいかに小食でいらしたか、パンはある特定のパン屋さんのしか召し上がらなかった、など話してくださいました。外出の折にいつも手にしておられたご愛用の杖を、私の母がご遺品として頂戴し、まだ洒落た杖などなかった時代で、透き通ったブルーの、しかも頑丈な杖を母はとても喜んでその後一〇年程、大事に有難く使わせていただいた。

奥の寝室の壁には作り付けの書棚があり、厚手の木の板がびったりと何枚も打ち付けてあり、分厚い本がたくさん並んでいた。題名、著者、発行所、発行年などをタイプし終わった順にダンボール箱に詰め込み、

結果的に和書三一九冊、洋書二八五冊、計六〇四冊のリストアップを五月半ばに終え、学校への発送の荷造りもお手伝いしたような覚えがある。貴重な体験をさせて頂いたのだ、と今更のように有難く感謝している。

成瀬記念館では、本年一月一五日から三月二日まで、上代タノ先生関連の展示会が行われた。昨年六月、卒業六〇周年を祝った我々新制二回生英文学科卒業生の今年度幹事は、



上代タノの授業（1951年）
右端が筆者



英文学科新制2回生（2013年）
左端が筆者

この催しを知って、是非クラスの皆で一緒に拝見しよう、と電話網を急遽めぐらして、「二月二〇日上代展見学およびミニクラス会」ということになった。賛同した一〇名が集まり、天候にも恵まれて、拝見しながら先生の思い出、こわかった、先生の授業は緊張し続けた、などをてんでに話し合い、思いがけない幸いな一日を楽しむことができた。この二葉の写真の内、校門の前の写真

はこの時のもの。もう一葉は、我々が卒業した年に完成した泉山館内の教室で、最上級生だけがこの建物で最後の後期授業を受けることが許された、当時真新しい教室だった。上代先生は米文学を教えてくださいました。その泉山館も今やすでに無く、その後には泉プロムナードの芝草が広がっている。建物よりも人間の方が長持ちする、と感じる次第。

終戦三年後日本女子大学校入学、

翌年新制に移行して日本女子大学に再入学した我々は、戦後厳しい環境の中で、生まれて初めて体験する自由の有難さと難しさを満喫しながら五年間の学生生活を楽しんだ。この度いろいろ振り返る機会に恵まれ、諸先生方、友人たち、他皆様への懐かしさと感謝と

が交々に頭の中を駆け廻っている。

*図書館友の会は上代タノの提唱により一九六五年に設立、上代は初代会長を務めた。

（昭和二十七年英文学科卒業

まつもと せいこ）

理学部開設二〇周年に思う

今市 涼子

一九九二（平成四）年に私立女子大学初の理学部が本学に誕生してから二〇年が経ちました。この間、学部生三一九七名、修士（理学）二八八名、博士（理学）二四名の卒業生を世に送り出す事が出来ました事を心より嬉しく思います。思い返せば、理学部設立は産みの苦しみを経たものでした。一九〇一（明治三四）年に日本女子大学が創設された時の設立趣意書には、理科部も含まれていたものの、実際には諸般の事情により、家政学部、国文学部、英文学部の三学部でスタートすることになったと伺っています。しかし成瀬仁

蔵先生の教育理念のもと、日本女子大学校では創設当初から物理学、数学、化学、生物学など理系科目が揃っており自然科学教育が重視されてきました。

一九四八（昭和二三）年、新制大学として日本女子大学がスタートした折、家政学部の中に家政理学科一部（物理化学専攻）と家政理学科二部（生物農芸専攻）が作られました。その後家政理学科一部に数学が加わり、理科教育の充実が計られました。その後理学部設立の機運が高まり全

その後理学部設立の機運が高まり全学的な組織の中で理学部設置の検討が何度も行われたそうですが、学内の経済事情のため、最後の段階でいつも見送られてきたようです。私事ですが、一九六五（昭和四〇）年に就任された有賀学長時代に家政理学科二部の学生だった私も、今すぐにも理学部ができるという噂話を聞き、「もう少し後で入学すれば理学

部卒業になったのに」と残念に思った記憶があります。しかしその後も理学部設立はなかなか実現せず、一九九〇（平成二）年に西生田キャンパスに人間社会学部の新設が行われ、その二年後に理学部設立がやっと実施されました。本当に長い道のりでした。理学部設立にご苦労いただいた諸先生ならびに学内外の方々に對する感謝の気持ちは、この後何十年記念を迎えても変わることはないと思います。

二〇二二年九月二日、二〇二二年二月二日に理学部開設二〇周年を記念した成瀬記念館の企画「目白の理系女子物語」展が開催されました。ここでは女性科学者の道を切り開いた先駆者達、そしてその後が続いた後継者たちの業績を紹介し、本学の理系教育の歴史を振り返りました。また研究・授業の今昔として、開学初期に授業等で使われていた古い機器や

当時授業レポートとして書かれた顕微鏡観察の描画等と、現代的な機器や標本、現教員の教育・研究内容などを比較展示し、時代とともに変わる理学教育の実際を紹介しました。

さらに記念事業の一貫として、明治末期に購入されたウニやハチなどの動物図・解剖図の大形掛図を百年館ロビーにパネル展示いたしました。

これらはオーストリアの学者により編集された一八枚で、明治後期の教育学部の動物実験授業（高倉卯三磨先生）でも使われていた様子が写真として残っており、日本女子大学の理学教育の歴史の古さを示す大事な財産の一つとなっています。これらの掛図はサイズが大きいだけでなく、精細に書かれ、動物体内の各器官も色分けされている見事な逸品です。百年館ロビーで迫力ある動物図の前でしばし立ち止まって見入っている在学生等の姿は印象的でした。



上：百年館ロビーでのパネル展示
下：明治後期の教育学部の動物実験

さて私達を取り巻く社会に目を転じますと、この二〇年間、世界では女性の社会での活躍を後押しする施策が取られ、重要ポストにつく女性の割合が増えてきました。しかし日本では一九九九年に男女共同参画社会基本法が制定されてからもなお、女性の活躍が遅れており、特に学術分野における女性研究者の比率は十数%に過ぎない状況が続いています。このような事態を受け、文部科

学省では二〇〇六年から科学技術振興調整費「女性研究者支援モデル育成事業」を開始し、本学も理学部を中心として「女性研究者マルチキャリアパス支援モデル」を提案し初年度に採択されました。採択されたのは一〇大学でもちろん女子大は私ども一大学だけ、採択が決まった時には申請に関わられた先生方は、日本女子大の理学部ここにあり、という心境であったと推察いたします。四年後の採択事業の終了後、本学でも以前からあった支援に加えて産前・産後休暇、育児休業期間内の代替要員の補充制度、研究支援員雇用制度や



「目白の理系女子物語」展示室風景

福利厚生支援が強化されたことは喜ばしいことと思っています。

一七世紀、近代自然科学研究が始まって以来、自然科学の発達は私達の暮らしに数えきれなくらいの恩恵をもたらしてきました。しかしそれは同時に環境問題、エネルギー問題、生物多様性問題など多くの問題を起こしています。二〇一一年三月一日に我が国を襲った東日本大震災とその直後に起きた福島原発事故

は、今の私達の自然科学の技術は自然をコントロールするにはほど遠いことを示しただけでなく、むしろ「これまでと違った新しい価値観に基づく持続型社会の構築が必要である」ことを私達に教えようとしているように感じます。

理学部一〇周年を祝った頃にはIT革命が話題になっていましたが、その後の一〇年間で社会の変化はめまぐるしく、ソーシャルネットワークの拡大による世界のグローバル化は予想を上回る勢いで進んでいます。こんな中、最近、理系女子を指す「リケジョ」という用語が広く使われるようになりました。これは現在の日本で理系女子の活躍が大いに期待されていることを示しており、今後ますます広がるグローバル化、そして自然との共生を模索する今の時代において、新しい価値観の創成にむけて今、女性の新しい視点が必要

とされているからではないでしょうか。新しい社会を切り開き、社会を支える「志の高い理系女性」を育成することこそ、日本女子大学理学部の務めと考えています。今、理系女子に吹いている追い風に乗って、私ども力を尽くし、来る三〇周年をより発展した理学部として迎えることができるとを願っています。

(日本女子大学理学部長

いまいち りょうこ)

女子大の森の保全について

関口 文彦

ここでいう女子大の森は、本学の西生田キャンパスの大部分を占める樹木の森である。森は春には木々の芽吹きと花々が命の躍動を覚えさせ、夏には樹木の緑が強い日差しを遮ることの恩恵を感じさせ、秋には落葉樹の鮮やかな紅葉が冬の到来を予告させ、冬には青空に伸ばす裸枝の雄姿が越冬の勇気を喚起させるといった季節感を提供する。正門から西生田成瀬講堂までの道沿いに植えられている桜と楓は、西生田キャンパスを取得してから五年目（一九三九年）、当時の教職員と学生・生徒の皆さんが植樹されたものである。そ

の植樹風景は、『写真が語る日本女子大学の二〇〇年（二〇〇四年発刊）』に見ることができると。

女子大の森では最近、コナラやクヌギなどの落葉樹の倒木や枝折れが目立つ。この現象は台風などの強風が主な原因であるが、樹木の伐採や植林という森の更新作業が停滞していることも見逃せない。つまり、森の樹木が高齢化していることを物語る。荒廃する森をどう救うかの話し合いは今から一〇年前（二〇〇三年）、附属幼稚園から大学までの教員で組織される「理科縦の会」でもたれた。その結果、有志が集まって「西生田キャンパスの森を考える会」を設立し、森の保全と教育的利用を研究目的とした研究テーマの立ち上げに発展させた。この研究テーマは幸いにも、総合研究所の二〇〇三（平成一五）年度の研究課題に採択されることになった。以後、研究

テーマは一部変更されたが、研究目的を変更することなく研究が継続している。

老齢化した落葉樹林の伐採による森の更新

老齢化した樹木の更新は二〇一〇年の春に計画された。具体的には（一）更新する候補地とその面積の選定、（二）伐採の時期その処理法、（三）更新する樹木種の選定、（四）更新方法、①伐採した樹木種の萌芽枝条の利用、②森で採取したタネからの発芽個体の移植、③萌芽個体と移植した個体の管理方法などが検討された。更新する候補地は水田記念公園のコナラークヌギ群落に定め、その面積は八〇ヘクタールとする。

伐採は二〇一一年二月に実施され、伐採した樹木の年輪は七三年から九〇年までを刻んでいた。現在、伐採したコナラやクヌギの切り株からは

十数本の枝条が発生し、その一方で
は附属校園の児童や生徒が二〇一
一年秋に集めたコナラやクスギのタネ
を大学ほ場にまき、その発芽個体を
育成中である。今後は切り株に萌芽
した枝条の中から強健な枝条二〜三
本を残すことや、タネからの発芽個
体を鉢上げし、仮移植を行う予定で
ある。

アカマツ林の復元によるマツタケ狩 りの夢

大学テニスコート上の東門に至る
稜線にはアカマツの朽ち株が立ち並
んでいる。この場所にかつて、アカ
マツ林が存在したことの証拠である。
このマツ枯れは、三〇年前に発生し
た大気汚染や外来のマツノダイセン
チュウによってもたらされた。現在
この稜線には二本のアカマツが生存
する。二本の木はマツ枯れに強い個
体と推論できる。そこで、アカマツ

林を復元するには稜線上に生存する
二本のアカマツに頼らざるを得ない
と考えた。

二〇一二年一月三日開催の川崎
市多摩区制四〇周年記念事業の三大
学制的探訪の際、アカマツの芽生え
によるアカマツ林の自然育成法を西

生田総務課に進言した。話の要点は
二本のアカマツの周囲には常緑樹の
ヒサカキが密生していることと、ア
カマツの芽生えは太陽の降り注ぐ裸

地に成立す
ることであ
る。西生田

総務課がこ
の話を内容
をご理解い
ただき、今

年の二月中
旬にはヒサ
カキの伐採
をすばやく

実施してくれた。現在、アカマツの
周辺部はヒサカキとコナラの切り株
(平均樹齢は五〇年前後)を残すだ
けで、林床は裸地となっている。そ
の伐採した後の情景を写真で示す。
今年の六月ごろには、アカマツの芽
生えが見られるかもしれない。

将来的にはマツタケ狩りが期待さ
れるが、多くは望めない。森の管理
作業をお願いしている園芸業者さん
からは、西生田の山にはマツタケが



稜線上に生き残った2本のアカマツと周辺のヒサカキの伐採状況 2013/3/19 撮影

生えない、せいぜいトリユフの仲間
のシヨウロ（松露）ぐらいと聞く。
一方で、マツタケは二〇年生のアカ
マツの根に発生するので、マツタケ
狩りはまだまだ先のことではある。
そのため、マツタケの胞子が好む養
分の少ない比較的乾燥した環境づく
りやマツタケの成熟胞子を散布する
方法も…の暗中模索や妄想が止まら
ない。

女子大の森は厳冬期の二月に、下
草刈りや落葉掻きなどの管理作業が
実施されるようになりました。私たち
の研究をご理解くださった結果と思
っています。四季折々に、コゲラが
木を叩く音が聞えます。春には首が
疲れますが、木々の芽吹きや花々を
見あげてください。夏と秋にはカの
襲撃とクモの巣の顔面パッキングに
悩まされますが、静寂そのものです。
必ず感動する光景が季節ごとに広が

っています。気軽に森に入ること
をお勧めします。これから、より親
しめる森づくりを目指します。

（日本女子大学名誉教授

せきぐち ふみひこ）



日本女子大学の一貫教育 における実践的平和教育

～小笠原サマースクール～

生野 聡

創立者・成瀬仁蔵の平和思想が女子教育の一貫教育を通して、それが行動と実践を生む平和教育運動として展開できる諸層を研究し、それを実践していくためにも、この研究をさらに深め「一貫教育校としての実践教育を」との願いで、研究を重ねてきたこの数年間。小学校高学年から中学、高校、大学の児童、生徒、学生、そして幼稚園から大学までの教職員が一同に参加する第三回目的宿泊型研修「サマースクール～小笠原」を「生命の鼓動を肌で感じる小

笠原で平和について考える」とのテーマの下、二〇二二年夏に行った。回を重ねるごとに、応募者が増えており、今回は抽選の上、選考された。

小笠原へは、片道二六時間もの時間がかかる船旅である。どこまでも続く水平線、きれいな夕日や朝日、三六〇度海に囲まれて、「この海の広さ！海の温度が1℃上がっているということ、大変なことなんだ。」と、参加者のつぶやき。船内ではお互い自己紹介から始まり、平和学習「トランセンドメソッド」にも挑戦。イルカの大群の歓迎を受けて小笠原へ上陸した。村役場や観光協会の皆様から島料理やスイカ割りの歓迎を受け、いよいよ戦争体験者と共に歩む戦跡ツアーに向かう。海に沈む沈没船、防空壕や、野ざらしにされたままの当時の建物や砲弾。「戦争は、殺し合いと破壊です。」との戦争体験者のメッセージは今も耳の奥に残



戦争体験者の話真剣に耳を傾ける参加者たち

っている。参加者は、「戦争は、敵と戦うだけではなく、自分の中にある恐怖や不安とも戦わなくてはならないことを知りました。」と感想を述べていた。小笠原でのいくつかの活動と参加者の感想を紹介させていただきます。

シーカヤック活動では、「力を出さずだけでは、船は進まなかったけれど、力を合わせたら進みました。」



ウミガメの飼育体験

との感想。ボートツアーでは、「海に入るのが怖かったけれど、勇気を出して入ってみた。海の上も美しいけれど、海の下にもきれいな世界があることを知った。勇気を出して知ることができた世界。これからも小さな勇気を出していろいろな世界を知りたい。」と。ナイトツアーをしていた時、浜辺で騒いでいる人を見て「無関心で残酷だなんて思った。騒ぐことでウミガメが浜に産卵することができないということを知らないからやっているのだろうけれど、知らないことって怖いな、知る努力をしなくてはいけないんだなって思

った。」と。ウミガメの飼育体験や、保護活動、放流を通して、「小笠原で生まれた亀が、本州で発見されたことを知り、本州と小笠原の海がつながっていることをあらためて実感しました。同時に、本州の海を守ることも小笠原の海を守ることにつながることも知りました。」と。

小笠原での生活最終日に、自由時間をどのように使うかを生徒たちだけで話し合った結果、浜辺のクリーンアップをしたいという意見がまとなり、出港ギリギリの時間まで清掃活動ができたことも、このサマースクールでの成果の一つかもしれない。

「些細なことだけれども、きっとこのことが、いろんな生き物の平和につながる大切な一歩なんだと思う。」と。また、生徒や児童だけでなく、引率者の学びも大きな意味のあるものになった。幼稚園から大学までの教育の中で、成

瀬先生の三綱領は具体的にどのような営まれているのか、またそれぞれの部署で抱えている問題も共有でき、一貫教育の実践体験をすることができた。「あのサマースクールを思い出として終わらせたくないのです。これからも平和や環境、生命、愛、責任、地球へとテーマを広げて、サマースクールを平和への出発点にしたいのです。」と、熱く語る高校生の思いのように、このサマースクールが答えを出して終わるのではなく、参加者ひとりひとりがそれぞれの課題を残して終わることができた。小笠原返還四〇周年と、創立者生誕一五〇年のこの年に、全国に先駆けて一貫教育の実践ができたことも、その実践が三回を数える程になったことも、後藤祥子元学長を始め、蟻川芳子前学長、久保淑子元理学部長をはじめ、多くの方々に支えられ、また多くの便宜を図っていただいた



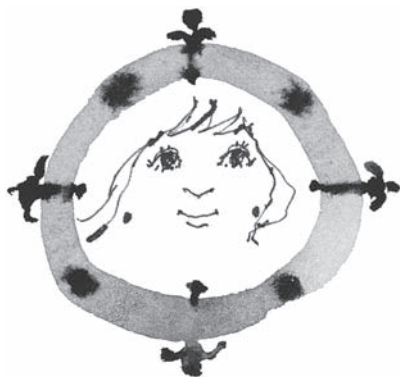
美しい夕日をバックに記念撮影

おかげである。心からの感謝を申し上げ、来年以降も実践的平和教育へのご協力をお願い申し上げたい。

女性の自立と世界の平和を創立以来問い続けてきた本学は、あらゆる世代の要請に応えて、真に生き甲斐ある世界の実現に全力を傾注する社会的使命を負っている。平和な社会を築くための広い視野を持ち、社会を構成する一員として平和への努力と活動を行う人を育てること、家庭

や社会におけるピースメツセンジャーとしての女性の活躍を支援することこそが本学の社会的責任であると実感している。

また、本学における平和研究および平和教育は幼稚園から小学校、中学校、高等学校、大学、大学院、総合研究所、生涯学習センターにおける研究・教育活動を通して深化し、さらには桜楓会、婦人国際平和自由連盟日本支部といった組織や、平和を考える有志の会などに繋がり、それぞれの立場で工夫を重ね、独創的な平和学の研究及び教育・啓蒙活動を総合的に集約している。こうした本学独自の平和に関する先行研究・活動に基盤をおきつつ、平和教育を一貫教育の視点で体系化することで、「平和の具現化」を日本女子大学の社会的使命として教育活動をしていく。今後ともさらに研究を進めていく。



(日本女子大学附属豊明小学校教諭
しょうの さとし)

成瀬仁蔵の実践倫理にみる神智学

大森 秀子

婦一協会が一九二二(明治四五)年に成立した時、組織メンバーが「婦一」という言葉に込めたニュアンスは異なっていた。成瀬の婦一思想形成について、中郷邦は、「成瀬は多様な且つ多面的な宗教や思想の根源の一致を求めて、婦一協会の設立に奔走したのであり、協会の成立は、かねてから切望していた精神界の統一をはかる場が出来たことを意味した。特に成瀬の当期の講演や講話によくみられるのは、欧米の神秘学や神秘思想の紹介であり、その影響である。エマソンやメーテルリンク、フリーメイソンに言及しており、そこにある非合理的あるいは超合理的な思想を撰取しつつ婦一思想の形成に至ったといえよう。」と述べている。これまで筆者は成瀬が

到達した、宗派を超えた宗教思想ともいえる婦一思想をエマソンの超絶論のうちに分析し、成瀬の「婦一」を多様性の調和の原理として位置づけることを通して、多元主義的な側面について描出してきたが²⁾、神秘主義的な側面への十分な考察には至らなかった。そこで、本小論では、主として成瀬の実践倫理における神智学に焦点をあて、成瀬の婦一思想形成を吟味したい。

一 成瀬仁蔵の神智学への関心

神智学はロシア人のブラヴァツキー(Helena Petrovna Blavatsky, 1831-1891)と英国人のペザント(Annie Wood Besant, 1847-1933)によって始められ、一八七五

(明治八)年にニューヨークに神智学協会が設立された。その後、協会内部がベザントの陣営とジャッジ (William Quan Judge, 1851-1896) の陣営の二つに分かれた。前者のベザントは、一八八二(明治一五)年に本拠地をインド南部のマドラス郊外のアディヤールに置き、英国人のリードビーター (Charles Webster Leadbeater, 1854-1934) と共に、神智学協会を指導した。一方、後者の流れを汲むのが、ティングレー (Katherine Tingley, 1847-1929) である。彼女は本部を南カリフォルニアのポイント・ロマに置き、独自の教育を行った。

成瀬の神智学への関心は、帰一運動を広めるために一九一二(大正元)年に渡米した際、ティングレーの設立したラジャ・ヨガ学校 (Raja-Yoga School and College) を訪問したことによく表れている。ハワイ経由でサンフランシスコに八月一九日に到着した成瀬は、その後、八月二六日にロサンゼルスに移動、翌日に午前九時の汽車で当学校の所在地であるサンディエゴのポイント・ロマに向かった。学校名のラジャ・ヨガという語の語義は、「大結合」で、「身體、精神、靈の凡ての官能の完全なる調和」を意味する。学校参観は、滞在先のロサンゼルスで子どもの伝染病が流行していたことから、子どもに接近しないようにして参観するという形で見学している。

帰国後、成瀬は、「漫遊みやげ」として、ポイント・ロマの様子を『家庭週報』に次のように、記している。

このポイントローマのカレーヂは他と又違つた一種の學風があると豫ねて聞及んで居りましたので私はその教育の依り來る原動力、其の教育の靈に接して見たいと思ひまして其れを主に出掛けたのであります。校長チングリー氏は留守でありましたが其の代りを務めて居る、方に會つて來意を告げますと、前からの通知もあつて餘程待つて呉れられたさうでありました。……私は二日間教授の宅に泊めて貰ひましてそして校内の諸設備と其の雰圍氣に接する事が出来ましたが、此所では特に精神教育に注意して、土地から云つてもかくの如く世間から離れた自由の空氣の漲つた別天地に在ることであるから其の生活も實に理想の境であつて將來は此所に理想の學校町を成立せしむる計畫であるらしい、今も其の幾分は實現されつ、あるのであります。……この人々はあまり多く發表するといふよりも寧ろ沈黙を守つて修養を積んで居る所などさながらに印度の秘密教の信者が行をするときも斯くの如き有様であらうと思はしめた、校内全体の空氣が形式よりも最も靈の生活に重きを置いて居るのであります。……今日の文明の教育があまりに形式的

學問に傾き機械的説明注入的智識に流れて行き人間の精神、人格の教育を省みらるゝ、事の少なくなつた事を感じて今日の其れ等と反對の内的生活よりして建設にかゝらなければならぬといふ事を主張して居るやうに感ぜしめられたのであります。⁶⁾

このように、成瀬は当カレッジの特殊な学校の雰囲気を感じとり、靈的な教育をみてとつた。宗教的雰囲気について、成瀬も目を通したところのある神智学のテキスト *Theosophical Manuals* の第一〇巻には、「どこへ赴こうとも、どの人間もある質を伴つた雰囲気を携えており、その雰囲気は自分が接するあらゆるものに影響を及ぼす。そして、それは自然のより細かい力や物体に働くことで、自らの運命や運を大いに決定づける。この雰囲気はその人が自らの思いによつて周りに紡ぎ出しているものなのである。」⁷⁾と記されている。神智学の学校が目に見えないものを重んじた背景には、知性を脳の構成物質の機械的相互作用の結果とみなす近代科学に基づいて、試験を正当化する教育や、生存競争・適者生存によつて利己主義の温床と化した近代教育制度に対する批判があつた。神智学が求めた教育は、「独立独行の精神、あらゆる人々への愛、無我、相互扶助、そして何よりも自分で考

え、推論することを教える」教育であり、「内的感覺、能力、潜在力を発達させること」、「子供一人一人を一人の個人として扱い、その子の特別な素質が完全に自然な発達をする為に、力が一番調和し、バランスを取つて発達するように教育すること」であつた。⁸⁾

当時、日本では *theosophy* は靈智学として紹介され、ブラヴァツキーの『靈智學解説』のポイント・ロマ版が一九一〇（明治四三）年に博文館からステイヴンソンと宇高兵作によつて翻訳出版された。成瀬も所有するその本の巻末で、テイングレーの世界同胞及靈智学会は二つの目的を挙げている。次の通りである。

本會は同胞主義を以て自然界の一事實とし、其の主要の目的は同胞主義を教へ、之を證明し、人生の活動力となすにあり。第二の目的は往古及近世の宗教、科學、哲學及び美術を研究し、天然の法則及人間の靈性を考究するにあり。⁹⁾

歸一協會では、一九一三（大正二）年一月二〇日に海軍機關學校教師のステイヴンソンが來賓として招かれ、「靈智學に就きて」と題して講演している。彼は靈智学の主要目的である世界同胞主義について、同胞關係

が既に存在している自然界の事実に基づくものであると説明した。世界の人類はそもそも精神の奥底で結合しているもので、身体的にも頼らざるを得ない。例えば、世界の人間を土に根をおろした樹とみなすと、人間の異なる種族はその枝で、そこから小枝や葉に分かれる。細分すると、その葉の合成部分を構成している原子があり、これが一個人の人間にあたる。若し一本の木の枝が他の枝と闘争して、各自の利益だけを計れば、その幹は、健全な状態であることはできず、その生活も完全に営むことは不可能である。また、枝も同じような病的な状態で悲惨な闘争が続く間は、成長発達することができない。全体の幹は、不調和の影響を受けて悩む。こうした観点から、靈智学は人間が皆同胞であることを唱道し、世界のあらゆる宗教や哲学を研究して、それらに含まれている真理の根本が一つであることを示すよう求めた。¹⁰⁾

この講演に対し、成瀬は「予が彼の地を視察したる時は、恰も流行病の蔓れる中ばなりしを以て、親しく接近することを得ざりしも、靈智學の教育主義は、眞に賞讃に値するものなるを信ず。而して其の秘訣は今夕の講演の如く、各自の神性を發揮することに存すと信ず。云々。」と述べている。¹¹⁾

二 実践倫理におけるモナドロジーへの着目

実践倫理の中で、成瀬が神智学について初めて語ったと思われるのは、一九一〇（明治四三）年六月下旬のことである。その時期の成瀬は過去九年間、科学、社会学、論理学、認識論、宗教学などを研究した一つの結論として、「宇宙の本體は果して何であるか。總ての宗教の眞髓は果して何であるか、吾々が最も追求して居る、その眞のエッセンスは果して何であるか、私はそれをレアライズしたいと思つたのであります。」¹²⁾と述べ、宇宙への宗教的洞察を深めている。神智学を取り上げる前の導入的講義で、スピノザのパンセイズムやライプニッツ（Gottfried Wilhelm Leibniz, 1646-1716）のモナドロジー

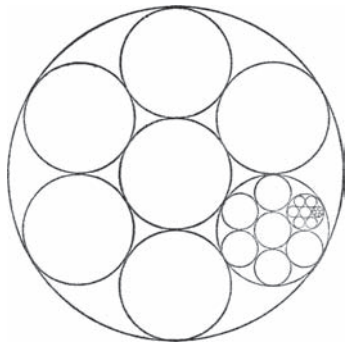


図1

の学説を披露した。特に、ライプニッツの説については、次のような図1¹³⁾を示している。七つの円を基本に内在的精神組織体としての宇宙が描かれているが、成瀬個人の理解によるも

のなのか、定かでない。¹⁴⁾

『実践倫理講話筆記』をみると、二月二日に大学部全体を対象として「Monad」と題する講義を行っている。ライプニッツのモナドロジを多元論的唯心論として紹介した成瀬は、モナドが人格の本体、靈的原子であり、「単一であつて、同時に多数である。即ち、部分と云ふことは無数なものであつて、其の無数と云ふことが一つと云ふ全体になつて居るものが、本体であると云ふ意味です。」と述べ、ジェイムズの One is many. At the same time, many is one. に通じる考へであるとしてゐる。六月二二日には第二・三学年に対して、Monadology と題する講義がなされた。成瀬は次のように説明した。

Leibnitz ハ萬有ノ原子ヲ Monad ト云フモノデアルト云フ「コト」ニシタ此ノ Monadology ガ物質ヲ精神化シタモノデアル……其ノ中ニ生命ガアリ又默包的觀念ガアル或ハ潜在觀念ガアル故ニ宇宙ニハ命ナキモノハ決シテ存在スルモノデハナイ

各 Monad が宇宙全体ヲ反射スル所ノ事實ヲ云フノデア
ル各 Monad ハ之ヲ小宇宙ト名付ケル夫レデ Leibnitz ハ

The many in the one. 多数ガ單一ノ中ニ籠ツテ居ルト云ツテ居ルソシテ此ノ各個人ハ過去將來ヲ持チ運ンデ進ミツ、アルモノデアルト故ニ之ヲ Mirror ト云フ Monad ハ宇内ヲ反射スル鏡即チ Mirror デアル其ノ鏡ニ映ル或ハ其ノ中ニ凡テ全体ヲ反射スル之レガ即チ各 Monad ノ中ニアル処ノ perception 知覺ト云フノデア

宇宙ノ中ニハ一ツノ大キナル調和ガアル之レハ吾々ガ實際感スル処ノ實在デア

Leibnitz ハ個人ト云フ「コト」ニ非常ニ重キヲオイタ之レガ Spinoza ト違フ処デ Spinoza ハ Unity 全体ト云フ処カラ出發シタ……Monad ガ調和統一サレテ居ルノハ神ノ定メデアツテ之ハ Monad ノ出来ル前カラチャントキマツテ居ル「コト」デアルト云フ之レヲ説キ明カスニ Leibnitz ハ音楽ヲ奏スル一隊之ハ大キイノハ三〇〇人カラ組ミ立テル喇叭ヲ吹イタリ太鼓ヲタ、イタリ銘々別々ニ独立シテ自分ノ樂譜ニ由ツテ自分ノ音ヲ出シテ居ルガ併シ其ノ結果ハチャント一ツノ音楽ヲ奏スル「コト」ニナルノデア

ル吾々 Monad ハ銘々區々ノ事ヲシテ居ツテモ全体ノ律ハ必ず調和スベキモノデア

第一と第二の引用文では、モナドが万有の原子として、

生命ある精神的な個別の単子でありながら宇宙全体を反射する活きた鏡であることや、「一における多」の表出について論じている。第三の引用文では、モナドロジューはスピノザのいうような全体から出発する概念ではなく、個体存在から出発する概念であり、無数のモノイドは宇宙に調和する精神として、それぞれ自らの楽器を奏で、予定調和的に宇宙を自己のうちに映し出すことを明らかにした。

さらに、認識論的考察では、ライブニッツがロックの精神白紙説に対して受動的な印象を否定し、潜在意識を持つ精神の自発的な表出を肯定する一方で、デカルトの内観念説に対しては経験によって明晰な知覚に進むことを説いた点に触れている⁽¹⁷⁾。

三 神智学の宇宙進化と人間の精神的進化

先の講義を経て、成瀬は神智学講義へと進んだ。人間の内的生命、精神的生命の本質が何であるかについて説明するのに、神智学説を引用した。

内在生命、精神的生命の本質は何であるかといふと、それをアストラル・ライト *Astral Light* と名[付]ける。アストラルとは天乃至人間以上の世界を意味するのである

が、その「靈光」の出来る原素は即ちライブ「ブ」ニッツのいふモノイドである。モノイドはあらゆる精神界の活動の本源であつて、靈界はそのモノイドの海洋なのである。吾々の精神の中にはこの靈光があつて、肉體感覺に由らない交通をすることができるのであるが、宇宙はそれで満たされてゐるのである⁽¹⁸⁾。

これによれば、靈的モノイドである人間の精神にはアストラル・ライトがあり、それが真に完全に働けば、その人の内に宇宙のリァリテイが感得される。アストラル・ライトについて、成瀬は「科學的には一つの新假説であるけれども、此に依つて吾々の生活の精神的要素を研究し、説明し、更に進んでは、運命の眞意、生命的價值そのものを知ることができると思ふ⁽¹⁹⁾。」と述べている。加えて、成瀬は二つの図を提示した。

図2⁽²⁰⁾と図3⁽²¹⁾が *Theosophical Manuals* からの引用であることを指摘した高橋原は、図が「やや唐突な印象で、読者は奇異の感を抱くのではないだろうか。」と述べている。そこで、ドイツの教育実践家であり、神智学から思想的影響を受けた同時代人のシュタイナー (*Rudolf Steiner, 1861-1925*) の解釈に耳を傾けてみた⁽²²⁾。

シュタイナーによれば、宇宙は転生して進化する。そ

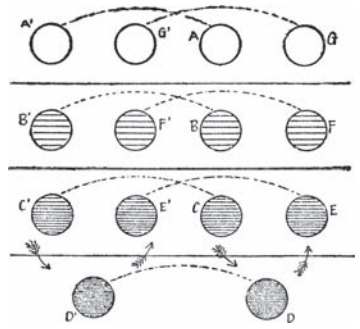


図2

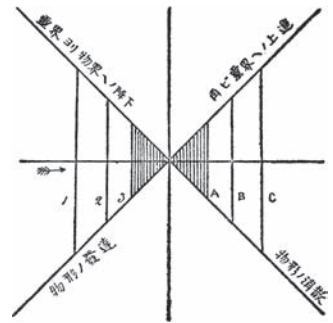


図3

根源時代」の七つの時代があり、ポスト・アトランティス時代まで進化してきた。かつて太陽と月と地球は一つであったが、ヒュペルボレアス時代に太陽が地球から分離し、レムリア時代に月が地球から分離した後、人間が男女に分かれ、輪廻が始まった²³⁾。この説明に従うと、図3は地球紀の生命状態の描写であることが理解できる。

他方、*Theosophical Manuals*の第一七巻の原文によれば、図2は「月の連鎖(左)と地球の連鎖(右)」の対応関係を示すものであり、月からそれ

に対応する地球への「生の波動の伝達」を示している。

現在の地球の生命状態は最も低い物質状態にあり、Aから一段ずつ下降してきたものであるが、再びGへと上昇し、七つの状態を巡る。DとDは月から地球の類似した状態へのエネルギーの通過を点線で表しており、地球が月よりも少し高みに昇り、進化を成就していくことを示している²³⁾。

こうした宇宙の進化を成瀬はどのように受けとめたのだろうか。成瀬は図2について次のようにいう。

この宇宙の本體の実現される階段には無数のものがあるが、此を簡単に圖示すれば、次のやうな形に表はす

の進化は土星紀、太陽紀、月紀、地球紀、木星紀、金星紀、ウルカヌス星紀の七つの年代紀を辿り、現在、地球紀である。それぞれの惑星の状態は、七つの生命状態(周期)に分かれ、「第一元素界、第二元素界、第三元素界、鉍物界、植物界、動物界、人間界」と発展するが、現在、地球紀の鉍物界に位置する。そして、各生命状態において「無形状態、有形状態、アストラル状態、物質状態、彫塑状態、知的状態、元型状態」の順に七つの形態状態(球紀)が現れ、現在は地球紀・鉍物界の物質状態である。この物質状態の中には、「ポラール時代、ヒュペルボレアス時代、レムリア時代、アトランティス時代、ポスト・アトランティス時代、第六根源時代、第七

ことができる。……最上階は最も神に近いところであつて、その上にゆくと全くアストラル・ライトの世界である。……常に變り變つて進んで往つて、決して同じ繰返へしをするといふことがなく、絶えず循環をしてゐる。而して總ては—吾々と天體とも—非常に密接な關係を保ち(前圖中の點線はそれを示す)、その間に一つを中心を作つて、渦巻き形の形に循環が進むのである。それで吾々の人格も、生命より生命への、無限の循環的進化の途中にある。²⁵⁾

この言葉から、成瀬は全宇宙の進化のうちに、他の惑星と關係を保ちながら限りなく進化する人格の有り様をみてとつたことがわかる。さらに、この無限の循環的進化の状態を平易に示したものが図3であるとし、次のように説明を続ける。

線で埋めた黒い處が鏡物界で、最も物質的な處である。Aは植物界、Bが動物界、Cが人間界で、靈界より物質界へ、物質界から靈界への循環を示したのである。人間が今日の状態をしてゐるのは、一旦低く降つた物質から、進化の法則に由つて、長い過程を経た後に、半ば精神的存在となつたものであつて、猶ほ進化を續けて、更に限

りなく上階に上ぼりつ、あるのである。その各段階に於ける無数の物體の間の精神的關係、又それ等と至上の精神的眞體との關係を結ぶものは、即ちアストラル・ライトである。吾々はその精神の奥底に於て、萬物總て同一のアストラル・ライトを呼吸してゐるのである。これに依つて、吾々の心と心、人格と人格とが直接に相交通してゐるのである。²⁶⁾

つまり、現在、人間は物質的な状態から長い過程を経て半ば精神的存在となつてゐるところであるけれども、上階へと昇りつつあるものであり、無数の物體はアストラル・ライトにおいて結ばれることによって、他者との人格關係に入ると、成瀬は考えた。

四 宗教的人格教育への神智学の適用

一九一二(明治四五)年の一月二八日に桜楓会正準會員を対象とした修養会が開催された。そこにおいて、成瀬は宗教的な人間が内側からアストラル・ライトを放ち、他者に感化を与えることを明らかにした。

私共思フニハ祈リハ無線電信ノ振動ヲウケルノデアル
吾々ノ頭ハコノウケル態度デアルモ一ツハ本當ニ感動

シテ國家ヲ思ヒ會ヲ思ヒ友人ヲ思ヒ真心ヲ以テ會スルナ
ラバ矢張り *Astral Light* トナツテ友達ニ感化ヲ傳ヘル
「コト」ガ出來ルノデアル私ハソノ「コト」ヲ眞ニ賛成ス
ル者ガアルナラバ櫻楓會員デ同情ナク思ヒ飢エタリスル
ガコ、ニ多クノ兄弟ガアツテ働イテ居ルト思フナラバコ
ノ振動ヲ感シテ淋シクハナイノデア²⁷

これによれば、祈りは無線電信の受発のようなものである。深く感動して、真に國家を思い、桜楓会を思い、友人を思つて祈るならば、その精神の活動はアストラル・ライトとなつて、他に伝えることができる。

その後、一九一六（大正五）年末の講話で成瀬は、学園の中に「雰圍氣の創造がなくてはならぬ」「東京全市の空を蔽ふところの雰圍氣を作り出さなくてはならぬ。」として、「總ての精神から起る、その震動の調和、共鳴によつて、合奏される音楽が、この大空に響きわたらなくてはならぬ。これがために忘れてならぬことは、吾々の人格と、宇宙の大靈と、即ち人と天と、我と神との間の震動、共鳴交響が、この『眼に見えぬ王國』——精神の雰圍氣の音楽的基調であるといふことである。高いところから響いて來るその震動が、吾々の心の琴線に響き、精神の電線に傳はつて、そこから湧き出して來るところ

の生命」「美、愛が中心であることを忘れてはならぬ。」²⁸と述べ、学生が精神的律動の諧和を内容とする、アトモスフィアを理解することを助けるために、一枚の油絵を示した。それが図4の絵である。

この絵は、神智学協会のベザントとリードピーターの *Thought-Forms* という書にある絵を、成瀬が雑司ヶ谷に住んでいた画家の柳敬助に頼んで模写してもらつたものである。成瀬が所有した本は、一九〇五年の版で、初版は一九〇一年に発行されている。その本がおよそ四六判程度の大きさであるのに対して、柳の絵は縦が一一六・四センチ、横が八〇・七センチで、かなり迫力のあるサ



図4（口絵参照）

イズとなっている。柳の絵の色使いや形は原画とほぼ同じものであるが、一箇所だけ、異なる箇所があり、オリジナルで描かれた教会堂に替えて、豊明図書館兼講堂・豊明館が描かれている。その妻であり、日本女子大学校の卒業生の柳八重は、次のように述べている。

或る朝、成瀬先生が模造紙をいっぱい抱えて宅のアトリエに来られました。そして今日の午後、実践倫理の時間に使うからこれを描けとおっしゃって一冊の本を示されました。その本の一枚の挿画が非常に良いから、実践倫理に話したいというわけで、学生に見せるにはこの本では小さいから、大きく描いて見せるといふ意味なのです。つまりある会堂があり、その中の大きな精神がずっと天に向かつて上がるということを表わしたものだといふことで、私共女性の恩人であり、絶えず勉強をしぬいてこれ、時代と共にどんどん進んでいらした先生の心に感動を与えた題材を描き写すといふ、たいへんありがたい機会を私共は与えられたのであります²⁰。

ベザントとリードビーターが友人に依頼したオリジナルの絵は、オルガンで奏でられたワグナーの音楽（楽劇「ニルンベルクのマイスタージンガー」第一幕への

前奏曲）が人に作用した振動の形体であり、音楽家によって感化された人々の思いが、想念形体として、天上へと放射していくことを示すものとなっている。

同様に、成瀬は日本女子大学校で学び生活する学生が、それぞれの祈りにおいて、あるいは献身的行為によつて振動作用しあつて、その崇高なエネルギーが聖なる天上へと注ぎ込んでいくことを期待して、非常にインパクトのある教育方法で、精神の律動が精神的空気となつて出現することを教えた。振動しあう宗教的な人間について、ベザントとリードビーターは次のように述べている。

この放射している振動が、その実体ではなく、思ひの性質を伝えることを理解すべきである。もしヒンドウー教徒がクリシユナに献身して、没頭して座っているなら、彼から注ぎ出す感情の波はその影響の下に来るあらゆる人々の献身的な感情を刺激するが、イスラム教徒の場合、その献身はアラーに対してであり、他方、ゾロアスター教徒の場合はアフラ・マズダ、キリスト教徒の場合はイエスに対してである。研ぎ澄まされて、ある崇高な対象について考えている人は、振動を自分自身から注ぎ出しており、この振動は他者に同様のレヴェルで思ひをかき立てる傾向がある²⁰。

このように、著者はいかなる宗教や宗派に属しているかは関係なく、崇高な思いを有する人の宗教的な感化力は絶大なもので、人の心を振動させ、大きく揺さぶるとした。こうした神智学の考えに共感した成瀬は、人格教育のための宗教教育の方法として、日本女子大学校で瞑想、人格の感化、校風の感化などを重視したのである。

おわりに

成瀬は日本女子大学校の実践倫理講話で、実に多くの哲学、倫理、宗教的な価値を取り上げている。その中で、彼は婦一協会を設立する二年前に、ライプニッツの多元論的調和の思想を紹介し、動的な単子であるモナドが個別に表出するものでありながら、宇宙に調和する精神として予定調和的に宇宙を自己のうちに映しだすことを明らかにした。そして、その靈的なモナド概念を梃子としながら、神智学の領域へと踏み込み、宇宙進化的な考えを人間の精神的進化に適用して講義した。なかでも、アストラル・ライトという概念を神智学説から導き出した成瀬は、それを内的生命の本質として理解しただけでなく、祈りや人格の感化、学校の雰囲気などにその発現を認め、既成宗教にとらわれない方法で宗教的人格教育を行った。この教育実践はラジャ・ヨガ学校での見学から影響を受

けた結果でもあった。もとより神智学が同胞主義の実行を目的としていたことで、その個と全体の調和の思想は、成瀬が婦一思想を形成していく上でプラスに働いたといえよう。

〔注〕(1) 中島邦「婦一協会小考(二)―その成立を中心に―」

『日本女子大学紀要 文学部』第三六号(一九八七年三月)、五九頁。

(2) 拙著『多元的宗教教育の成立過程―アメリカ教育と成瀬仁蔵の『婦一』の教育―』(東信堂、二〇〇九年)の第八章を参照。

(3) 成瀬以前に当学校を訪問した日本人に、中島力造(東京帝国大学倫理学教授)がいる。彼は世界教育制度視察の一環として一九一〇(明治四三)年にそこを訪れ、規律を高く評価している。(Emmett A. Greenwalt, *The Point Loma Community in California, 1897-1942: A Theosophical Experiment* [Berkeley and Los Angeles: University of California Press, 1955], p. 88.)

(4) 『家庭週報』第一九八號(一九二二年一〇月四日)、二頁。第一九九號(一九二二年一〇月一八日)、一頁。

(5) スティーヴン『靈智学に就きて』『婦一協會會報 第四』(一九一四年七月)、一一六頁。

(6) 『家庭週報』第二二六號(一九一三年三月二八日)、三頁。

- (7) *Theosophical Manuals, Vol. X* (Point Loma, California: The Aryan Theosophical Press, 1907), p. 9.
- (8) H・P・ブラヴァツキー、田中恵美子訳『神智学の鍵』(神智学協会ニッポンロッジ、一九八七年)、二四六—二四七頁、二五〇頁。
- (9) エッチ・ビー・ブラヴツキー、イー・エス・ステブンス、宇高兵作訳『靈智學解説』(博文館、一九一〇年)、巻末。
- (10) スターヴン「靈智学に就きて」、一一〇—一一三頁。
- (11) 「スターヴン氏の講演に就きて」『歸一協會會報 第四』(一九一四年七月)、一一一頁。
- (12) 仁科節編『成瀬先生傳』(櫻楓會出版部、一九二八年)、三二五頁。
- (13) 同右、三三二頁。
- (14) 成瀬の所有したライブニッツの図書は、英文訳書『形而上学叙説、アルノーとの書簡、モナドロジー』(Gottfried Wilhelm Leibniz, *Discourse on metaphysics, Correspondence with Arnault, and The Monadology*, trans. George R. Montgomery [Chicago: The Open Court Publishing Company, 1908]) である。この本に図一はみあたらないが、成瀬は最終章の *Monadology* を入念に読んでゐる。
- (15) 『日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述 実践倫理講話筆記 明治四十二年度ノ部』(日本女子大学成瀬記念館、二〇一二年)、一五九頁。
- (16) 日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述 実践倫理講話筆記 明治四十三年度ノ部「第二、三、學年ニテノ御話」(一九一〇年六月二日)、成瀬記念館資料。
- (17) 同右。教育における自然研究を重視し、学習過程の第一段階に印象を置いた成瀬にとって、自然は単なる科学の対象ではなかった。成瀬が自然を崇高な精神の表出した世界であると受けとめ、女性が経験を通して外に向かつて行動し成長することの意義を強調するに至る思想形成の動因の一つとして、モナドロジーを挙げることが可能であろう。
- (18) 仁科編前掲書、三三二頁。
- (19) 同右、三三五頁。
- (20) 同右、三三三頁。
- (21) 同右、三三四頁。
- (22) 高橋原「初期宗教心理学と成瀬仁蔵」『日本女子大学総合研究所紀要』第六号(二〇〇三年)、一一二頁。
- (23) R・シュタイナー、西川隆範編訳、洪沢比呂呼撰述『ベーシック・シュタイナー人智学エッセンス』(イザラ書房、二〇〇七年)、二〇〇—二〇二頁。
- (24) *Theosophical Manuals, Vol. XVII* (Point Loma, California: The Aryan Theosophical Press, 1908), p. 34.
- (25) 仁科編前掲書、三三二—三三三頁。
- (26) 同右、三三四頁。
- (27) 日本女子大学校長成瀬仁蔵先生述 実践倫理講話筆記 明治四十四年度ノ部「正准會員修養會ノ御話」(一九

一二年一月二八日)、成瀬記念館資料。

(28) 仁科編前掲書、四二一—四二二頁。

(29) 柳八重「ありのままのこと」『桜楓新報』第一八五号
(一九六七年一月一日)、三頁。

(30) Annie Besant and C. W. Leadbeater, *Thought-Forms*
(London and Benares: The Theosophical Publishing
Society, 1905), p. 24; 田中恵美子訳『想念形体—思は
生きている—』(竜王文庫、一九九九年)、二四頁。

(青山学院大学教育人間科学部教授 おおもり ひでこ)



『成瀬仁蔵著作集』に収録されなかった新資料を順次発表する。今回は講話一編である。式日、始業式、終業式など行事の折の、また実践倫理の成瀬校長の講話を、丹念に記録したノートが残されている。罫紙にカーボンをはさんで浄書され、各々こよりで綴じられたノートには、成瀬自身による訂正、加筆の跡が残る。なお、

- 一、表記に関しては、片仮名書きの原文筆記を平仮名表記とし、明らかな誤字、脱字を改めるとともに、文字を統一した。
- 一、あて字については原文通りとした。
- 一、文意を明確にするため、句読点を必要な限り付した。
- 一、欄外に書かれていた註を、一部見出しとした。

成瀬仁蔵講話 1

大学部全体の為に ―明治四十四年三月二十二日―

本校で、精神教育の基礎として居る宗教とは如何なるものなるか。又、其の宗教と本校の教育とは如何なる関係があるかと云ふ事につき過日発表になり、今日はそれに引き続き、桜楓会の精神と学校との関係、使命は如何

かと云ふことにつき、皆さんから御発表になった。之れは、只書物の上でなく十年間の経験を基として、今日の社会の現状から割り出し広い関係を考へたもので、独り考ふるのみならず各自の深い経験の一部、及び将来の希

望、団体の運動についての計画と言ふべきものを御発表になつたのであります。最後に、全体の關係が如何かを統一しなければならぬ。

それで、私から其結論を言つてくれとの事であります。しかし、私がこれを命令的に独断的にするのでなく、皆と共にしたいと思ふ。

個々の経験、各部の意見は、此の間から出て居る。これが材料となつて纏めがつけられ、全体に通じた精神が十分に發揮せられなければならぬ。それであなた方自身で、それに御働きになる事を望むのであります。それは、それにつき少しづつ問ひを出して、意見を集めては纏めて、進みたいと思ふのであります。

そこで先づ初めに、何処に統一をつけたらよいか。凡ての部分に共通して、凡ての部分支配するものは何に置いてよいか。實際真髓となる實質は何かと云ふことを鮮明にして置かなければならぬ。それに就いては、凡ての部分に通じて居る統一点を見出さなければならぬ。其の統一と云ふことは絶対となづくるが、それは抽象的のものでなく、十分の内容がある。それは各々の特徴を持つて居るのである。故そこに区別があつて、しかも統一しなければならぬのであります。

最初に、凡てに通じて居る目的、或は理想を定めなけ

ればならぬ。そして爰に存する特徴、職責が明らかにならなければならぬ。其の間に、共同が完全にならなければならぬと思ふのであります。

先づはじめに、各々の部門の目的を明らかにしなければならぬ。少くとも次の四つに分つことは必要であると思ひます。

- 1 教育の目的に関する問題
- 2 修養に関する問題
- 3 宗教に関する問題
- 4 桜楓会の問題

統一点を何処に置くべきか

其の目的の統一点は何処におくか。みなを帰着する所は何処でありましょか。

皆大目的のもとに、一とならなければならぬ。そこに種々の機関があり、各々に働きがあれば、各部に特徴とする目的を有して居ることもわかつて居らなければならぬと思ふのであります。

それで第一に、四つの世界の目的とする根本の目的は何であるか、其の統一すべき所は何処なるかを、先づ定めなければならぬのであります。

過日來、皆さんも其の目的を言ふたのであるが、今日は其の全体を考へて、其の關係をはつきりとつけたたいであります。其の問題をはじめに問ふのでありますから、何処からでも、今の尋ねに対して答へてもらひたいのであります。

其の根本の目的は、何でありましょか。

斯う云ふ時は、日頃言ふ哲学があるのであります。

・愛　人類の幸福　人類の進歩

これをも一つ統一するは、何でありましょか。

・善　真善美　完全

これをよせてもよいけれども、これで未だ足りない所がありませんか。

教育の目的は何か

昔は、教育の目的は習ふと云ふ事にあり、習ふと云ふ事は知るといふ事であつたが、此所には知ると云ふことがない。

今は、教育の目的はそうではない。先づ教育の目的は、ものを知つて知識を得、社会、人類の建設したるものを、永い間蓄積した技術、知識をうけつぐ。即ち生涯に必要な用意をするものなりと言ふて居るが、實際、今日の教

育の目的は何でありましょか。

習うたことを応用して、世を進歩すると云ふ答もあつたが、それでよいのですか。

人格を完成するには材料がある。教育は彫刻師が彫刻する如く、建築師が家を建て、又紙に書画をかく如きものであるか。教育に扱ふて行く材料は何であらうか。

各自に潜在して居る天性がある。それを出すのが教育である。人間には芽と云ふものがある。一つの埋つて居る種子がある。之れを出すのが教育で、教育のものは力であり、人格である。誠に不思議な力が出る。それを教育と言ふ。

教育をする目的を定めるには、被教育者の中の種子をきめなければならぬ。教育はあるものを出すものとするならば、其の出るものは何かと云ふことが定まらなければ、目的を定める事は出来ぬ。被教育者の実質、天性は如何なるものかと云ふことがわからなければならぬ。それがわかり、又一方では發展して行く方からも見なければならぬ。

先づ教育は、人間の凡て活動の起こる芽である。故に、之れを教育問題に第一に考へられなければならぬ。

宗教の目的は何か

究極の目的を定めなければならぬ。これを宗教と言ふ。宗教の目的は何ですか。

・意志の要求仮定、即ち善意。

Gladstone の宗教と云ふ所を読んでくらんなさい。宗教の信仰と云ふものは、何に土台を置くかと言ふに、三つの中の二つに置くと言つて居る。

1 Authority

2 Reason

3 Experience

最初の宗教は、Church and Bible によると言ふて居る。教会は確信せよと命ずる。故に神を信じ、Christ を信ずると言ふので、Reason は、学説で科学、哲学の道理が証明する故に、信ずると言ひ、Experience 即ち経験、之れは、自分が神を見、自分がChrist に遇ふた。Christ と交はりを致した。自分がそゝ云ふことを味はひ、そゝ感じて居ります故に、自分はそゝ信するのであると云ふのである。併し、第一の信仰は他の報告に過ぎない。第二のものは道理を以て信ずる。故に確信である。第三は自分の経験によつて信するのである。

我々の宗教

最後に我々の宗教は Authority でもなく、Reason でもない。やはり経験である。

本當の宗教のものは経験である、と Gladstone は信じて居る。

兎も角も、今日あなた方が一番先きに考へてほしいことは、Experience 即ち経験と云ふことである。

そこで、爰に私共が先づ目的を定めなければならぬことは、被教育者、即ち子どもを定めなければならぬ。けれども、それが大きくなると人となる。其の人間の中に色があるが、色を除き真髓はかりをとれば、男も女もみな人である。世界とか宇内とか云ふ人の境遇と、それを支配する God を知らなければならぬ。

世界は何、人は何、神は何、これ等をみな一つにして本体と言ふ。其の本体は如何なるもの、本体の根底は何かと云ふことが定められて、はじめて目的がきまるのである。

先づ、近世の科学、哲学、心理学、社会学などに於てきめた真理が、漸次、近頃に至つて、階段をふんで進歩するあとが明らかになつたのである。

近世、科学の初めに起つたのは物理。科学が研究して

纏めた所の宇宙の解釈は、ど一言ふたらばよいのですか。教育部の方、全体の関係は何ですか。

・力であります。

力にはいろいろあるが、力が一つ Organize されて居るのである。それは何ですか。

・機械 Machine

たしかに機械と云ふことも言へるので、今日の文明も機械的である。しかし、そのみでは止まないものである。それは生物学である。機械説が進んで、何ですか。

・進化

従来、固定したものだと思ふたが、物理学でも違つて居ることを知った。常に動くもの、目的に向つて進化し、変つて行くのである。

宇宙の実体は何か。

・有機体 Organism = Living

之れは機械に命が入つて、宇宙は生きた機械であり、有機体であると云ふことになつて居る。

次に発達したのが心理学で、前では十分の説明できないと言ふて居る。

心理学より言ふ宇宙は何か。

Consciousness。生きたかひは、意識である。従来は、

科学の作用で熱や光が出るよゝに考へて居たが、今日で

は、実体が精神的なものであると云ふことになつた。

Consciousness を見出した時に、個性を見出した。それでは未だ全体の統一をつけた所のものではないと云ふことになつて、次に、社会学が下した定義によると、実体は Experience である。

Consciousness は、言葉で言ふと意味がわかりかねるが、Consciousness は Social relation である。自他の関係から起こるものである。

人生は経験である

そこで、此の段々、人間と云ふものは Experience である。換言すれば、実体は、或は人生は経験である。経験は即ち行ひである。経験の要素は行ひである。

行ひは Adjustment である。行ひは社会的関係をつくる事である。

宇宙の実質は経験であり、経験は活動であり、活動は社会的関係を完成する所の仮定であると云ふことになる。

経験が宗教の目的である

しかば、経験は何か。人間が中心、要求してやまぬ、

必然的に傾く、目的として居る、理想として全力を注ぐ所の熱心に、必死の力を尽して戦ふ所の目的となるものは何か。其の目的が、教育の目的である。それが桜楓会の目的である。凡ての目的の真髓の経験が、宗教の目的である。其の人生の目的、宇宙の目的の Essence は何か。経験の骨髄は何か。宗教の命が何であるか。Gladstone は、Authority にあらず、Church にあらず、Bible にあらず、道理にあらず、経験である、と言った。其の経験は何か。それに答へらる、人は、言つて御覧なさい。

・ 向上心　私共の生きる事と思ひます。

只生きるだけで、よいでしょうか。

之れは言葉を言つても、語意内容が充実して来たから少しわかりにくい、それを言つて考へを啓かなければならぬ。

Absolute value

経験の Essence 即ち実体の Essence は、之れを Absolute value と言ふ。何と訳してよいのですか。価値と訳して、わかりますまいか。

愛、幸福、進歩、善、美、完全、功利、真理、善意、みな Value である。これらを統一したものが、Absolute

value である。

これをよく Realize するには多くの時を要しますから、十分言ふ事は出来ぬが、凡そ察する事が出来るであらう。十分、其の所を味はふよーにしてほしいと望むのである。

其の前に一寸説明することは、Gladstone の経験は、Reason にあらずと。故に、宗教は教会の權威、Bible の歴史によるものではない。又儀式を守つて洗礼をうけたとて、宗教と言へない。精神がなければ即ち偽善である。何か宗派のものでなければ宗教でないよーに思ふと云ふことが以前にあらはれ、宗派に属したものは他の宗派を悪むと云ふ偏見があった。Gladstone は、Reason でないと言ふた事は、Dogma でないと云ふことである。

経験の要素

感情、情緒、知識は人間経験の要素となつて居る。感情ばかりが人間の Essence と思ふては、間違ひである。

こゝに、Reason でないと言ふて、あく迄考へることは宗教でない、とこつては誤りである。

Value と言ふと、真も善もある。しかし経験の真髓は、其の本体は Abstract と云ふものではない。Value の特徴は直覺的、即ち経験である。

これを他の言葉を借りて言ふと、美術に言ふ、玩味すると云ふことである。Valueの価値の感情が賞玩する、又は満足と云ふのが、我々の経験である。又、適合、調和、統一と云ふ其の時の経験、感じ、これは到底言葉を以て言ひあらはせないものである。各々個人的のもので、主観的に其の人、其の人の程度に応じた發揮があるのである。自身で行ひ、自身で味はふと云ふことでない、到底本當のものではない。本當の価値をRealizeすることは出来ないのである。之れは言葉では到底と云ふかしくないので、又一部だけを経験しても、Absolute value究極の真髓に達することが出来ないのであるから、そこに行くには銘々が深く考へなければ、明らかになることもむづかしいと思ふ。凡て人生が目的として居り、宇宙が目的として居る実体は、Absolute valueに達したいと思ふて進んで居る、と言ふことが出来るのである。勿論、生きることもあり、活動もあり、働き合ふと云ふこともあるが、其の奥には深く求めて居る所のValueがあるのである。

価値ある尊い行ひをしたい、共同するならば其の価値ある結合をこしらへたいと望むで居る。それを耶穌は天国と言ひ、仏教は極楽浄土と言ふ。凡てそこに理想あり、目的あり、要求があると云ふことは、つまりはValueで

ある。

宗教的生命はValueの發揮したものを言ふ。これを真善美、又は幸福と言ひ、Valueの感じをさして美と言ふ。社会的關係の間にはあらはれたValueを愛と言ふ。其の向上的、進歩的Valueのあらはれたのが、満足である。教育の目的も、こゝである。今日の教育の方法は、経験をさせる、Expressに重きを置いてしななければならぬ。我々の修養、信仰、桜楓会の目的の統一点は、Absolute valueに達し、Realizeしようと思ふ所にならなければならぬと思ふのである。

実は、これをよくとくには書物にでもしなければ、一場の演説では出来かねるのである。

生活に、生きた経験にしよとつとめられた事があるからして、凡その所はわかつたと思ふ。勿論十分とは言はれぬが、私の言ふことは何処かと云ふこと、又従来勉強、修養につとめたが、一致すべき点はこゝであると云ふことはわかつただらうと思ふが、もしわからなければ問ひをお出しになると、一層はつきりすることかと思ふ。

第一、こゝに言ふ修養、宗教、教育の統一点がわからなければならぬ。

第二に、生活がわかつて、共働事業が、其の主義によつて満足に活動の出来るよゝにならなければならぬ。

この真髓が十分にわかれば、自ら解釈が出来ると思ふ。教育と修養との統一はわかたが、特別な点を挙げて、相互に関係して働く所をとかなければならぬが、到底この時間には出来ませんから、終りにも一つ纏めて置き度と思ふことは、其の凡ての Value のもとをして居る究竟の Value を追行し、原動力に向つて行くには、宗派的宗教と本校の宗教とが一緒になつて行くことはむづかしいと云ふ事は、もはやわかつたと思ふ。

それで最後に言つた宗教、即ち本校の宗教、精神的活動と、本校の教育と云ふものと一つにすることが出来る。そこに矛盾もなく、又各宗派より行くものあつても自由を妨げずに行く事が出来るが、いろいろ宗教の経験のないものが、かゝる信仰を基礎として、精神的の深い経験、絶対的価値を経験し得らるものかと云ふと、それは問題である。それが出来るならば、今後我々の信ずる宗教は日常如何にして行はれるか。桜楓会の改良、本校修養会等の集會に、かくの如き宗教をあらはして行く道はないものであるか。も一つ具体的にあらはれないと、自分の宗教である Absolute value をあらはして、安心立命の境に達することが出来難いよゝに思ふて、満足しないよゝな点があるが、皆の要求を充たすには如何にすればよいかと云ふ、実地問題を解決したいと思ふのである。

そこで私は、めいめいにお考へになりまして、それをしつてもらつて、出来るだけ私が纏めるよゝにしたいと思ふ。しかし之れは十年間考へ、研究し、努力奮闘して来て、解決せんとする重要問題である。果して、こゝに広い関係をもつ Value を実現し得らる、か。努力してみたいと思ふて、も少し皆が深く考へ、注意力を集中なさることを望む。大体の結びをつけたと思ふから、出来るだけ考へを出して下さるよゝに希望するのであります。

それでは聞きますが、

Christ 教会に属して居て、しかもそれを改善して行き、本校の宗教と相一致するに困難がないと思ふ人……………少数

仏教に属して居る人で、前と同じく困難を感じない人……………少数

Christ 教、仏教に属して居たが、それでのみ満足が出来ない。やはり本校の宗教によつて改善し、相一致せしめて行かれると思ふ人……………稍多数

従来、宗教の経験のない人で、本校の宗教を信じて、安心立命の出来得ると思ふ人……………多数

今一つ聞くことは、私共の信じて居る宗教で、従来の宗教のよゝな力が出るものかどゝか。

高尚で複雑なる Experience を論ずると、考へも時も

多くを要するから、単純な、極くはじめの階段の所をとき明したならば、最も深い所の経験に達し得らる、と思ふから、一寸説き明したいと思ふ。

宗教の起り

人間はみな幸福を望むのであるが、人間は不幸なもので、人生は無常である。其の不幸、無常は何かと云ふと人間の罪業である。宗教で、どこか救はれ度いと思ふたことは、罪が救はれたいと思ふたのである。これが宗教である。

人間の罪を救ふと必ず幸福の生活が出来、永久の命が得らると思ふた。宗教が目的として信じたのは、不幸のものをぞく、人間を不幸の根から救ふと云ふことである。

先づ直接にわかる不幸は、死と病とである。これは多くは不健康である。それで第一に福音を伝えるのは、病より救ふことと、貧から救ふことである。Christは人の身にある病を治したのである。Christがお出になると、数千の癩病患者が出て来る。狂人が来る。その他、熱病、流行病の人、女が来て、Christの衣に触れると、生涯不治の病が癒え、盲目が目あきとなったと云ふ。宗教は病

を治すると云ふことであつた。シヤカは貧人、病人、或は其の他不幸の根をなほした。故に多衆は救はれ、不幸の根をおさへて、幸福の芽を出し、人格の力を与へられたのである。

我が国の武士道も、釈迦の感化による所がある。

Christの威權、熱誠、一つはValueが発揮し得る力を持つて居た。故に人は皆、神の力があると信じて居た。

「悪よ出でよ」の言葉が非常に力があつて、強き命令であつた。病人が健康になつた。盲目が目あきとなつた。之れは何の力か。今日は決して不思議でなく、不可能でなく、出来得ることである。何となれば、こゝに慥かに不思議なる力、意志の力、神通力、不思議なる神の力があるのである。しかし其の盲目を癒したる力は、其の偉大なる力は、其の盲目の中にあつた。皆の中にあつたのである。何故出来ないか。何故之れが不幸になるか。其の力をおさへて居たのであるか。各自にこの貴い神の力があるのである。只Christを信じた人に感動を与へ、暗示を与へたのである。

爰に、非常なる精力集注が出来たならば、Geniusを発揮することが出来るのである。宗教の経験は独りChrist教のみならず、仏教にも、他宗教にも、又Christ以前にもあるのである。

Christの踏んだ土、衣服から力が出たのではない。若し川や土から力が出るならば、直ちに不幸が取り去られるわけである。今日、哲学、心理学、科学がわかつて居るのに、牧師の言葉で病が癒え、川の水でなほると云ふことは、信じられないのである。

今日の不幸を救ひ、人格を発揮することは、やはり今日に適した方法を用ひなければ救はれないのである。私の言ふ神は、凡ての人の内にあるのである。今日、真理を信じ、光を信ずることが出来るならば、昔と同じ経験を味ふことが出来ると確信するのである。

宗教の経験、偉大なる人格の発現、Absolute valueの実現は、四圍の境遇、外部の刺激に内より反応する方法である。今一つは、も一層深い所の経験を味はうに必要なるConsciousnessは如何なるものか。私の経験から言ふと、それは子どもの時であると思ふ。私の生涯に最も強い動揺を与へ、平和を破つたものは、即ち、母の死である。今日迄、自分を自覚し、喜びを味はうことは、非常なる苦しみで遇ふたと云ふ事である。非常の衝突、矛盾に出遇ふたことである。即ち、多くの事に抵抗したと云ふことである。

人間は誠に自ら矛盾し、小成に安んじ、旧習に捕はれ、無意識状態に甘んぜんとする弱点を持つて居る。これに

抵抗力を与ふる為に困難、不幸がある。そこでChristの偉大な人格の發揮され愛の輝ける所は、ゲッセマネの園に祈り、いばらの冠の恥辱にあひ、苦を嘗め、非常なる矛盾、衝突、攻撃を受けた所に、最も深く力を得、深く自覚があらはれ、愛が輝いたのである。我々の宗教はこの困難に戦はなければ、本当の進歩を見、階段に昇る事が出来ないのである。今日我々が是れ迄の習慣を破り、遺伝に動揺を与へ、眠れる女性を醒し、我が国風を刺激して、も一つ根本の宗教の力を發揮しよ、も一つ大きな力を發揮しよ、理想を表はさう。桜楓会の目的を達するには、必ず困難がある。それがあつて初めて力が出るのである。又、これによつて強い自覚を味はう事が出来るのである。此の宗教はむづかしい。之れを達するには奮闘、努力しなければならぬのである。この宗教的意識を發揮するには、むづかしいことがある。それで初めて力が出るので、それに向はなければならぬのである。一方、内より出るには積極に進まなければならぬと云ふのである。

之れを考ふるならば、果して世を救ふに此の宗教を以て出来るかと云ふ考へを、きめることは出来るのである。これに対して具体的にしたいと思つたが、時がないからやめます。

い立ちを回顧した *All Is But a Beginning: Youth Remembered, 1881-1901*, New York, 1972)、娘の Hilda Martinsen Neihardt が、父母の出会い・結婚とその後の生活を描いた *The Broidered Garment: The Love Story of Mona Martinsen and John G. Neihardt*, Lincoln and London, 2006)、早い時期の研究書として Julius T. House, *John G. Neihardt, Man and Poet*, Nebraska, 1920)、ナイハルトを主人公とした児童文学とすべき Marion Marsh Brown & Jane K. Leech, *Dreamcatcher: The Life of John Neihardt*, Nashville, 1983 等を参照した。

- 6) House, *Ibid.* p. 12.
- 7) 日本では大島良行 (1973 年)、弥永健一 (1977 年)、宮下嶺夫 (2001 年) の 3 種の翻訳があり、横須賀孝弘の研究論文 (「北米インディアン口承文学の伝統と『ブラックエルクは語る』」) もある。
- 8) Dick Cavett, *Introduction*, Neihardt, *Ibid.* (1972)
- 9) House, *Ibid.* p. 28
- 10) 注 3 で示した活字化された「山上の生活」のうち、詩にルビが付されているのは A のみである。引用に当たり必要に応じこれを元にルビを付した。また A と B、C では文字や連の区切りなど異なるところがあるが、この場合も原詩を参照しながら基本的に A によった。
- 11) 『家庭週報』431 号 (1917 年 8 月 31 日) (517)。
- 12) 同上、(516)。
- 13) 前注 2 の拙論。
- 14) 前掲『家庭週報』431 号 (519)。
- 15) 前注 3 と同じ。
- 16) 「願ひての意味も」は、前注 3 の B 及び C では「それらの意味も」となっているが、原詩によれば、このように訂正する必要はない。「願ひて」は「願ひ手」(be-seechers) の意。
- 17) B、C では「希望なき私」。しかし原詩によれば、A のままでよい。
- 18) 『家庭週報』436 号 (1917 年 10 月 5 日) (557)。
- 19) House, *Ibid.* p. 6

(日本女子大学名誉教授　かたぎり　よしお)

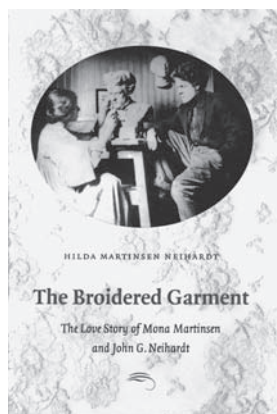
「馬鹿」な子を、憐れみ嘆く母の心を謳った詩である。

19歳の時出版された最初の詩集 *The Divine Enchantment* は、英雄クリシュナの母デヴァナギを讃えた叙事詩である。

パリで、ナイハルトの詩集を読み、感動して文通を始めたことをきっかけに結婚することになったモナ・マルチンセンは、金持ちの金融家の娘であり、彫刻家ロダンの弟子であった。彼らの娘の著書 *The Broidered Garment* (『刺繍の上衣』): *The Love Story of Mona Martinsen and John G. Neihardt*, の表紙カバーには、ナイハルトをモデルにして胸像を彫るモナの写真が使われている。

The Quest の献辞には「家族の女性たち。与えるもの極めて多く、得るもの極めて僅かな人々。母、姉、妻へ」とある。

女性たちに支えられて生きたナイハルトと、女子教育に生涯をささげた成瀬仁蔵。これもまた、両者の、不思議な縁である。



The Broidered Garment

- 1) 成瀬研究会(副島正人執筆)「軽井沢修養会における成瀬先生十回講義概要(三)」(『泉』第3巻第6号、日本女子大学、1958年)及び「同上(八)」(『同上』第4巻第3号、日本女子大学、1959年)
- 2) 「軽井沢山上の生活」に示された成瀬仁蔵の晩年の思想については、「フクシマ後の成瀬仁蔵—『軽井沢山上の生活』を読む—」(日本女子大学教育学科の会『人間研究』第49号、2013年)で述べた。またこのような成瀬の思想にはエマソンの影響があったと思われるが、これについては機会を改めて論じたい。
- 3) 『家庭週報』第432号(1917年9月7日)(529)。なお活字化された「山上の生活」には、講義直後の『家庭週報』第428号—第437号(1917年8月10日—10月12日)に連載されたもの(A)、成瀬の死後1923年に桜楓会が『大正六年日本女子大学校夏期寮に於ける成瀬校長の山上十回講演・軽井沢山上の生活』と題し小冊子として刊行したもの(B)、そして『成瀬仁蔵著作集』第3巻所収のもの(C)の3種類があるが、AとB、Cとの間には字句の表現に若干異なるところがある。本稿では基本的にAを元とし、『成瀬仁蔵著作集』第3巻の対応する頁数をカッコで示すことにした。
- 4) 『家庭週報』第434号(1917年9月21日)(549)。
- 5) ナイハルトについては<<http://www.neihardt.com>>という独自のWebsiteがあり、写真や諸資料の閲覧が可能である。またネブラスカ州バンクロフトにナイハルトセンターがあり、これもH.P.を持っている。刊本としては、彼の詩集のほとんどが復刻版またはオンデマンドで入手可能である。なお本稿のために、自らの生

私は原野の如くに謳はう。
満足して睡気さす神秘的なあたたかさに歌ふ原野の様に――。

そは私も原野の一部分なるが故に、
風や、電光も、矢張り私と親類なるが故に、
原野が愛して居る様に私も愛する、
暴風雨が悪んで居る様に私も悪む、
暴風雨が失望して居る様に私も失望する。
河が喜び、うたふ様に私も喜びうたふ。
すべての気分私に私の気分も合して謳はう。(557-558)

PRELUDE

*I would sing as the Wind;
As the autumn Wind, big with rain and sad with prenatal dread.
I would sing as the Storm;
As the Storm whipped by the lightning and strong with giant despair.
I would sing as the Snow;
Wailing and hissing and writhing in the merciless grasp of the Blizzard.
I would sing as the Prairie;
As the Prairie droning, in the heat, satisfied, drowsy and mystical.
For I am a part of the Prairie,
Kin to the Wind and the Lightning.
I love as the Prairie might love;
As the Storm would hate, I hate.
I feel the despair of the Storm,
Rejoice with the joy of the River.
Even as these would sing in their differing moods, I sing !*

9 ナイハルトと成瀬仁蔵

最初の方でのべたように、ナイハルトの父は10歳の時家出し、彼は残された2人の姉と共に母親一人の手で育てられた。母は裁縫などで貧しい家計を支えた。A *Bundle of Myrrh* の詩で *The Quest* に収録された *The Fool's Mother* (「馬鹿な子の母」) は、このような母を謳った詩であると言う¹⁹⁾。父親のいない、幼い

I join the armies of the Cloud,
The Lightning and the Rain.

Oh subtle in the sap athrill,
Athletic in the glad uplift,
A portion of the Cosmic Will,
I pierce the planet-drift.

My God and I shall interknit
As rain and Ocean, breath and Air;
And Oh, the luring thought of it
Is prayer !

8 大自然の中で、大自然と共に

第9講「山上生活に於ける結論会（上）」でナイハルトの最後の詩が読み上げられる。*The Quest* 冒頭にイタリック体で掲げられたプレリュードである。

これに先立ち、成瀬は次のように述べている。

「人生の困難、蹉跎、誤解は皆生活の旋律である。大自然の楽律である。この楽師は人間ではない、故にこの楽の聞手たらんとするものは人間を相手としては聞き分けられないのである、実に宇内、天地を相手として且つ聞き且つ合奏する所の音楽師であらなければならぬ。即ちその態度を以てこの人生を味ふ時は無音裡に人生の壮美の曲を聞き、歓楽盡ざる旋律に喜び止み難きものを見出すであらう。或る詩人は次の如く謳つて居る。¹⁸⁾」

まさにこの詩の、見事な解説である。

4 番目の詩とは逆に、1 連の原詩を 4 連に分けることによって、詩の内容が理解しやすくなっている。

(無題)

私は風の如くに謳^{うた}はう、
生みの心配、雨の壮大とを懐いて——吹く秋風の如くに——。

私は暴風雨^{あらし}の如くに謳^{うた}はう。
吹雪の冷き手に掴まれて喚き、悶え、叱^{しつ}つゝも——。

(無題)

お一、私を墓場の中に探して呉れるな。
よもや私はそんな土の中には居まい。
私は昼と一つになるために暗黒の障壁をつき破つて居る。
私は今まで、流れ去る事物を兄弟として居つた。
まことに哀れな、果敢ない浮いた喜びと、
縮み込む様な悲哀に浸つて居つた私は。
これから芝生の草と、陽に浴して居る草とに兄弟の契りを結ぼう。
私を経帷子で蔽ふ事は出来まい。
苦痛で磨き上げたこの鋭き、よろこほしき剣をもつ此の私は雲の中の電光の光雨
の如き軍隊に聯合する。
お一、骨鳴り血湧くこの青年の活気に満つる、靈妙高潮した喜びに充つる俠気よ、
こは宇宙の意志の一部分である。
この私は此の遊星の大勢を貫きささう。
我が神よ、天の太陽に於けるが如く。
呼吸の空気に於けるが如く。
私は相互を組み合せよう。
お一、斯の思想を誘引するものは、これ即ち祈りである。(549-550)

ENVOI

OH seek me not within a tomb;
Thou shalt not find me in the clay!
I pierce a little wall of gloom
To mingle with the Day !

I brothered with the things that pass,
Poor giddy Joy and puckered Grief;
I go to brother with the Grass
And with the sunning Leaf,

Not Death can sheathe me in a shroud;
A joy-sword whetted keen with pain,

It seems I must
At length become too much the kin of Dust,
Ah me, the fever born of Hate and Lust !
Ah me, the senseless unmelodic din !
Ah me, the soul-hope sick with fleshly sin !

And in my prison ancient dreams grow up
To fill with dust my cracked and thirst-betraying cup;
Dreams mantled in the purple of dead glory
That filled the æons out of reach of human story:
Not always have I worn these dusty rags !

The Purpose of my being falters, lags,
And I am sick, sick, sick to live again,
Yet not because of this poor dust-born pain
Do I cry out and grope about for thee,
I hear the far cry of my destiny
Whose meaning sings beyond the furthest sun.
I faint in these red chains, and I would 'rise and run,
O Center of the Scheme,
Star-Flinger, Beauty-BUILDER, Shaping Dream !

7 絶望から希望へ

ナイハルトの4番目の詩は、第7講「愛の生活」で紹介される。*The Quest* 最後の結句 (ENVOI) である。成瀬は第7講で、瞑想によって *Mental law* を感得し「至上の人格」に近づこうとすることは、現実の人生を積極的に生きることにはかならない。そしてそれは、真の愛、普遍的な愛をもって現実の問題に取り組むことを意味する、と説く。このように成瀬の講義は、後半に近づくにつれて、学生たちに積極的な行動や活動を呼びかけるものとなる。この詩は、絶望を克服して積極的な活動に向かう、希望と勇気を謳ったものである。

ただし訳詩も、原詩同様5連に分けた方が内容は理解しやすい。『家庭週報』の紙面の都合で、このようになったのかもしれない。

What part have I in sequent wretched eves,
Blear dawns, dull noons, the budding and the falling of the leaves?
Why must I drag about this chain of years,
Long rusted red with tears?
Why must I crawl when I have wings to fly?
Behold thy child — the Winged One — it is I !

At times here in the dust
I lift my head, I strive to sing — *I must!*
The miracle of growing wraps me round !
Light! Sound!
Form! Motion! Upward yearning! Outward reaching!
A universal praying, dumb beseeching !
I feel that I am more than flesh and futile,
A being ultra-carnal, super-brutal !
I understand these growing green beseechers,
These hopeful climbers and these earnest reachers !
I understand their yearnings every one,
How each tense fibre hungers for the sun !
I lay my hand upon the sturdy weed
Whose darkling purpose burst the prison-seed
And cleft the mud and took its light and dew,
Looked up, reached out, believed in life — *and grew !*
I know that we are kin;
That hope is virtue and that doubt is sin;
And o'er me comes a hungering for song :
I lift my voice — I falter. Ah, the long
Dumb years, the aching nights and days !
And yet I raise
My unavailing, immelodious cry.
Thine erstwhile singing child — behold ! — 'Tis I !

In this strange wretched prison of the soul
Shall I not lose my swiftmess for the Goal?

そは、人間の目も声も届かない太古から
虚栄を以て色どつて居る死の栄光の紫の衣で包まれて居る、
しかし、私は
いつでも、いつでも、この塵の檻樓を纏つてのみ居る者ではない。
私は、私の目的に向つての躊躇、彷徨の中から、再び甦りたいと、希ひに希つ
て思ひ煩ふ、
けれども、決して
この惨めな、塵より生れた苦痛から逃れたい為め、たゞ盲目滅法にわめいて汝を
さがし求めて居るのではない、
そは、私は運命についての遠い叫びを聞くがために、
あゝ、最も遙かな太陽の彼方から、歌ふこの運命の声が聞えて来る、
そうして、私は苦しみと、悶えの中に、あかき鏈に縛られたまま気絶する、
あゝ、私は起き上つて、走りたい、

おゝ、計画経倫をなす者よ
星をなげ出し、美を描く建設者よ、
理想、想像を生み出す者よ。(530-534)

PRAYER OF AN ALIEN SOUL

O CENTER of the Scheme,
Star-Flinger, Beauty-Builder, Shaping Dream !
Now as the least in all thy space I stand
An alien in a strange and lonesome land.
I lift a little voice of pigmy pain;
I hurl it out — up — down — and shall I cry in vain?
Hear thou the prayer that struggles in this song —
Let me not linger long !

I crave the boon of dying into life !
Extend a pitying knife
And let these flesh-gyves part, let me be free !
Are we not kin ? Am I not part of thee?
Am I not as a ripple in a cranny of thy sea?

これら、一つ一つのものが、憧憬して止まず、それらの繊維が、如何に緊張して、
太陽の光りを慕へるか、
私にはすべてがよく了解しえられる。

私はこの手を、健全に萌えたつ雑草の上ののせる、
漠然とした望、朦朧とした目的に生きて居る、この草でさへ、閉ぢ込められたそ
の穀を打ち破り、
その芽は土地に匍ひ上り、
露と光とをうけるではないか、外に抔り、生命を信じ、成長して止まないではないか、
あゝ、これらは、私の同族である事を知る、
さうして、希望は徳であり、疑ひは罪なる事をも知る、
おゝ、私の頭上には、共鳴して歌はんとの渴望が被つて居る、私は声を上げる、
しかし、又私は躊躇ふ、
永く過した無言の年月、咽喉のいたんだ幾多のよるひる、
その沈黙は歌ふことをゆるさない。
それでも、私は、一層声をはり上げる、
人にも聞いて貰へない、調子はづれの叫びをあげて。
おゝ、見よ、かつては歌つた汝の子供を、
そは私である。
この私の魂が、奇態な、惨めな牢獄の中で
私が、その決勝点に向ひ、意気こんで駆ける速さを、失ひはしないだらうか、

あゝ、
噫、なやめる私よ、

この、憎みと、情慾の熱に、燃ゆる様な私
何の意味なく、調子なく、たゞ騒々しい音である私、

あゝ、
噫、なやめる私よ

肉体の罪にて悩める魂の希望なる私¹⁷⁾、
私はこの牢獄の中にて、
昔、先祖が見たその夢を、屢々くりかへす、
そはこの心のいたみが、罅となり傷ついて居る、乾いたコップの様な私を、塵を
もつて充して来る、

あ、噫、しかし、そは空しく、何の応へも与へられずに終るのではあるまいか。

お一、汝、聞き給へ、

この悶えの中に歌はんとする切なる祈りを、

この悩みの中に、私を永く躊躇はせ給ふなどの祈りを、

私が永久に生きんがために死の恵を賜へとの祈りを、

汝の慈愛の剣をもて、我が肉の手がせ足がせをさきやぶり、自由の世界に私を放

ちたまへ、私は汝の身うちではないか、

私は汝より出た一部分ではないか、

汝の大洋の小さき入江にうごく一つの漣ではないか。

なさけない、惨めな、日の暮れがた、朦朧として不明なその暁方、どんよりと朧

な月の夕べ、木の葉が、芽ばえ又散り失せるそれらの現象の世界に、

私が何のか、はりがあらう。何故、私は永い年月の間、

この足に、涙を以てあかく錆びついた、鉄の鏈をひきずつて、歩かなければなら

ないか、

何故、私は飛ぶ為めの翼をもちながら、

こんなに匍つて居らねばならないか、

見よ、大翼あるものよ、汝の子供を、

これ即ち、私である、

時には私も、この塵にまみれながら、

頭を上げて、どうか歌ひたいと努力して居る、

どうしても私は歌はなければならぬといふ心にはげまされて、

すべての者の成長の奇蹟が、私の周囲をとり巻いて居るではないか、

あ、成長の奇蹟よ、

光、音、形、動揺、

縦に向上し、横に拡り、森羅萬象の天地の祈り、沈黙のねがひ

あ、妙なる奇蹟よ。

私はたゞ肉体ばかりの無価値なものではない、

動物的な空虚なものではない、私はずつと拙でた

もつと勝れた者である事を了解する。

私はこれらの青々と育つて居る願ひの意味も¹⁶⁾、

希望に充ち、上に上にと向上し、熱心に発展する鳶かつらの意味も

See God and laugh no more.

6 「異郷にさすらふ魂の祈」(PRAYER OF AN ALIEN SOUL)

成瀬は、第5講「自念生活の領土(下)―美の両極―」で3番目の詩を読み上げる。2番目と同じA *Bundle of Myrrh* 所収の「異郷にさすらふ魂の祈」(PRAYER OF AN ALIEN SOUL)である。

成瀬は「左に瞑想の心持を詩に依つて表されたものを掲げて参考に供せん」¹⁵⁾と述べてこの詩を紹介しているが、「山上の生活」で引用された詩の中で最も長いものである。成瀬のこの詩への思い入れは相当強いように思われる。それは、原詩の連の区切りと訳詩のそれとが、ほとんど一致しないところにも表れている。

冒頭と最後に出てくる「おー、計画経倫をなすものよ、星をなげ出し、美を描く建設者よ、／理想、想像を生み出す者よ、」というフレーズに示された宇宙を支配する絶対者を憧憬して、その下に跪きひたすら祈りを捧げ「最も小さき者の如く、私はしよんぼりと佇んで居る」などと表現される卑小な自己(「異郷にさすらふ魂」)が自虐的にまで執拗に描かれる。そして成瀬の訳は、この「異郷にさすらふ魂」の描き方において、原詩に比して、さらに徹底的であるように思える。「おー、汝、聞き給へ、／この悶えの中に歌はんとする切なる祈りを、／この悩みの中に、私を永く躊躇はせ給ふなどの祈りを、／私が永久に生きんがために死の恵みを賜へとの祈りを、」というフレーズは、あえて原詩の第1連と第2連の区切りを無視し、後半の原詩第4連に相当する個所では「噫、なやめる私よ、」というフレーズを、連を分けて強調し、繰り返すのである。このフレーズに相当する原詩の語は、単に「Ah me,」である。

成瀬はこの詩が、瞑想によってMental law(「必然的靈法」)を感得し、「至上人格」に少しでも近づくことを求めた「山上の生活」の趣旨を、最もよく表現していると考えたのかもしれない。

異郷にさすらふ魂の祈

おー、計画経倫をなすものよ、星をなげ出し、美を描く建設者よ、
理想、想像を生み出す者よ、
この広大無限の空間に、最も小さき者の如く、私はしよんぼりと佇んで居る、
そは寂莫な異郷に流浪ふ旅人として。
こんな小人の様な私は
今、痛ましい、小さな声を張り上げて、無二無三に喚く、

hands of a capricious Master !

There was movement in the air, motion in the leaves, a stirring in the grass,
Even as of the reverent moving about of a congregation.
Yet I stood alone in my temple; I stood alone and was not afraid.

But once a Something glided into my temple
And I became afraid !
As the Moon-Woman of the Greeks the Something seemed,
Lithe and swift and pale,
A fitting human sheath for the keen chaste spirit of a sword !
And then it seemed my temple was too small.
The Presence filled it to the furthest nook !
There was no lonesomeness in any cranny !

I knelt — and was afraid !

I felt the Presence in the winds;
I heard it in the streams;
I saw it in the restless changing of the clouds !
I tried to be as I had been, unbending, not afraid — godless.

Subtle as the scent of the unseen swinging censer of the wild flowers
That Presence crept upon me !

I fled from the terrible sunlight that burned the dome of my temple !
Childlike I hid my head in the darkness !
But I am not alone.

Where I have laughed defiantly into the blind emptiness,
Something moves !
I have placed my irreverent hand upon a Something in the Shadow !
I tremble lest the Thing shall illumine itself as the Dawn;
I tremble lest at last I must see God —

しかし私は、そこから、もしや光りを^だ発しはしないかと、不安な思ひに震へ上つた。
私は遂に神を見なければならぬか
神を見て、遂に再び又あんなに笑ふ事を、
止めなければならぬかと、
覚えず、戦慄した。(519-522)

THE TEMPLE OF THE GREAT OUTDOORS

LO ! I am the builder of a temple!
Even I, who groped so long for God
And laughed the cackling laugh to find the darkness empty,
I am the builder of a temple !

The toiling shoulders of my dream heaved up the arch
And set the pillars of the Dawn,
The burning pillars of the Evening and the Dawn,
Under the star-sprent, sun-shot, moon-enchanted dome of blue !

And I, who knew no God,
Stood straight, unhumbled in my temple:
I did not fear the subtle Mystery of the Darkness,
And I was only glad to feel the miraculous rush of sunlight in my blood !

I did not bend the knee.
I was unafraid, unashamed, careless and defiant.
I was a laughing Ego that felt within itself the thrill of potential godhood:
I stood as in the centre of the Universe and laughed !

And in my temple there were songs and organ tones,
And there was a silent Something holier than prayer.
I heard the winds and the streams and the sounds of many birds:
I heard the shouting of storms and the moaning of snows;
I heard my heart, and it was lifted up in song.
The Wind passing in a gust was as though an organ had been stricken by the

空気の中に、木の葉の中に、雑草の中に、
何者かのうごめきがあつた。
それは恰も会堂に敬虔の念を以て人々の動作する様に、
しかしそれでも私は尚、私の宮殿に孤独で突立ち、何の恐れをも感じなかつた。

時に突然、何者か私の宮殿に侵入して来た
私は、こゝに初めて恐怖を感じた
それは弱やかな、しかも速かな、青白い、淡い
恰も、劔の鋭い操の魂に、人間の鞆を冠せた様な
ギリシヤの月の女神の様に見えた
この時、私の誇りの宮殿は余りに小さ過ぎる事を感じた
如何に遠い隅々にも
如何に小さき石垣の破目にも
神の現存に充たされて
今は全く孤独寂寞の淋しさは消え失せた。

私は、そゞろに恐しくなつて、跪いた。

風の中に神、今在すを感じた、
流れの中にその声を聞いた、
極りなき雲の変化にその姿を見た、
それでも私はなほ
昔の様に膝を屈めずして、神在さぬを恐れは為まいと努力した。

野生の花が揺り出して居る目に見えない香炉の香の様な、幽妙さを以て
神、今、こゝに在すとの感じがひとしと心に浸みこんで来た。

私は、私の宮殿の円天井を焼いた恐ろしい太陽の光から逃げだして
子供の様に闇の中に頭を匿した。
然し私は、もはや孤独ではなかつた。

私が、盲目な、空虚なもの
傲慢無礼に嘲笑つた、その暗いかげに、何者かの動くのを覚えて
私は何となく、この不敬虔な手をその上に載せた

すれば、この詩に登場する「神」は、必ずしもキリスト教の神を意味するものではない。

偉大なる宇宙の建築者

見よ、私は天地の殿堂の建築者である、
永い間、暗の中に神を手探り
目に見えぬ世界の空虚な事を見破らんと嘲笑つた私
その私でさへ、今は殿堂の建築者である。

私は無明の世界に、命懸けに働いて居るこの肩をもつて
み空の下に大緑門を建てた
太陽は閃き、星はながれ、月の光は人を魅する
その青き円天井の下に
明と暮とに燃ゆる柱をたてた

神を知らない私は、私の造つた宮殿の中に
謙遜もしないで背高く突立つて
目に見えぬ暗の世界に神秘のある事を、
少しも恐れなかつた
たゞ、此の私の血管に太陽の光線が奇蹟の様に流れ入て来る事ばかりをよろこんだ。

私は臆かず、恐れず、恥ぢず、
傍若無人に、侮蔑的な気分を以て、大胆に、傲慢に、嘲笑して、
私の心の中には遂には神となるべき可能性が潜んで居るとの感情がながれ、私は
宇宙の中心であるもの、如く笑つて居つた。

私の宮殿の中には、歌声、楽の音が流れた
其処には実に不思議な、祈りよりももつと神聖な、もつと沈黙な何者が存立して居つた。
私は又風の音、小川の流れ、鳥の歌を聞いた
嵐の叫び、雪のうめきを聞いた。
尚、私は私の心の声をも聞いた。それは喜びの歌となつて高く高く上げられた。
通り過ぎた一陣の疾風は、気紛れな楽師の奏でたオルガンの様であつた。

Sound, sight, day, night
Fade, flee thence;
Vanished is the brief, hard
World of sense.
Hark ! Is it the plump grape
Crooning from the fence?

Droning of the surf where
Far seas boom ?
Chanting of the weird stars
Big with Doom ?
Humming of the god-flung
Shuttles of a loom ?

O'er the brooding Summer
A green hush clings,
Save the sound of weaving
Wee, soft things:
Everywhere a mother
Weaves and sings.

5 「偉大なる宇宙の建築者」(THE TEMPLE OF THE GREAT OUTDOORS)

「自然の織手」につづいて読み上げられたのが「偉大なる宇宙の建築者」(THE TEMPLE OF THE GREAT OUTDOORS)である。原詩は、ナイハルトが詩人として知られるようになった1907年刊行の*A Bundle of Myrrh*に収められていた。

私は以前この詩を、「人工の美」と「自然の美」とを対比させ、「完全は決して人工では求められない。如何に美であるといつても、人工の美は只一部分に過ぎず必ず欠けた所がある。」¹²⁾ ことを謳った詩として紹介した¹³⁾。「私」の作った「殿堂」又は「宮殿」(a temple 又は my temple)は、「偉大なる宇宙の建築者」(The Temple of the Great Outdoors)を超えることはできない、と謳ったこの詩は、まさに「人工の美」の成果である福島原発の事故の悲惨を謳ったものでもあったのではないかと述べたのである。

成瀬は「所謂無神論者が漸く神の世界を認めて行く所美はしき叙情詩を産むで居る」¹⁴⁾と述べてこの詩を紹介しているが、前述のナイハルトの宗教観を考慮

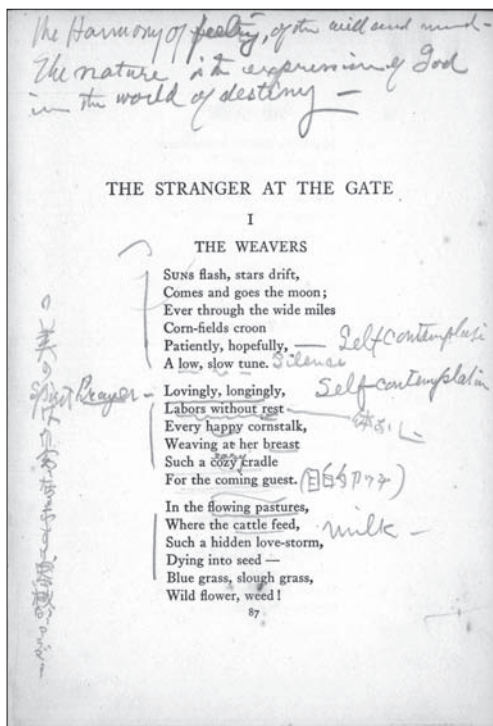
Lovingly, longingly,
 Labors without rest
 Every happy cornstalk,
 Weaving at her breast
 Such a cozy cradle
 For the coming guest.

In the flowing pastures,
 Where the cattle feed,
 Such a hidden love-storm,
 Dying into seed —
 Blue grass, slough grass,
 Wild flower, weed !

Mark the downy flower-coats
 In the hollyhocks !
 Hark, the cooing Wheat-Soul
 Weaving for her flocks !
 Croon-time, June-time,
 Moon of baby frocks !

Rocking by the window,
 Wrapt in visionings,
 Lo, the gentle mother
 Sews and sings,
 Shaping to a low song
 Wee, soft things !

Patiently, hopefully,
 Early, late,
 How the wizard fingers
 Weave with Fate
 For the naked youngling
 Crying at the Gate !



成瀬による書き込み

希望と真実に充ち、愛しつゝ、憧憬しつゝ、少しの休みもなく
幸多き玉蜀黍の茎の一本一本が霊の限り心の限りを捧げて働いて居る、
そは今、生れんとする若き客人の為に、何者の妨げなき心地よき揺籃を彼女の女
の胸の上に織りなして。

微風そよぐ牧場には静かに家畜が秣を食べる、
見よ、そこには隠れた愛の嵐が吹きわたり
一刻一刻、老いたる者は死んで行く
そは全く若き種を生まんがために、
沼に萌ゆる草、野には、笑む花、多くの雑草、
すべてたゞ愛情をもて若き種を作らんがために。

見よ、立葵の白き花の毛衣を
聞け、小麦の穂の魂の中にクツクツクと小鳥を呼ぶ微妙のさゝやきを、
今は六月の陽うらゝかな其時節である、
今は野にも山にも嬰兒の産衣を織り出さんと働いて居るその折である。

すべてを抱愛する夏の日
みどりの沈黙がこの夏の世界を被うて居る
小さく柔き微妙を織りなす箴の音の外
おゝ、深き沈黙の世界よ
見渡す限り、いたるところに、それら一人一人の慈愛の母が、今生れんとする赤子のため
うたひつゝ、織りつゝ、働いて居る。(517-518)

THE WEAVERS

SUNS flash, stars drift,
Comes and goes the moon;
Ever through the wide miles
Corn-fields croon
Patiently, hopefully,
A low, slow tune.

原詩は9連で成り立つが、成瀬はこのうち第5～8連を省略している。このように原詩を遠慮なく省略する読み方や、自在な訳語の選び方は、いかにも成瀬らしい大胆さであるといえよう。成瀬はこれらの詩を、まるで自作のものであるかのように紹介するのである。

成瀬はこの詩の紹介に先立ち、次のように述べている¹¹⁾。

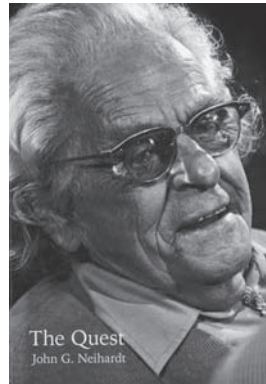
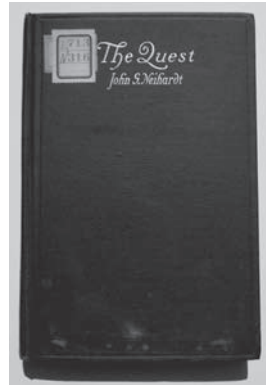
「軽井沢の天地は其の（自念の一片桐）生活をなすに最適の所であり、殊に夏は年の最高潮の季節である。故にこの時、この地を選んで斯く相互の間に一の空気を作り、天地の美を賛美して形の外、人工の外なる大なる世界を見出さんと目的を持ち来つた所以である。

此に到つて、人は、黙して自念するか、又天地のそれに応じて合奏するのみである。左に自然美を歌へる詩を紹介してこの心持を知る一助に供せん。」

ナイハルトの詩はアメリカ中西部「大平原」の広大な、まさに夏の自然の美を謳い上げたものであり、その自然の「織手」(The Weavers)である「母」を讃える詩であった。成瀬は、この詩を、あたかも夏の軽井沢の自然の美に誘われたかのように採りあげ、「形の外」「人工の外」にある「大なる世界」「自然美」へと学生たちを導くのである。

自然の織手

太陽の閃き、星の流れ、月の出沒も奇しき大空よ
見渡す限りの穀物の曠野に吹き渡る風
静かにひくき戦ぎの中に
あまたたび耐えつゝ、而も希望に輝いて
楽のさゝやきをたて、流れる。



上：成瀬文庫の *The Quest*
下：ニューヨーク州立大学
2008年復刻版 *The Quest*。表
紙はナイハルト

出版のナイハルトについての研究書のなかで、「今日でさえナイハルトは、西洋のキリスト教徒よりもヒンドゥー教徒の意識に、より深い共感を抱いている」⁶⁾と述べている。

ナイハルトはネブラスカ州ウェインのネブラスカ師範学校（現 Wayne State College）を卒業し田舎の学校の教師をしたり、インディアン相手の仕事をしたりする中でオマハ保護居住地のインディアンの老人たちと親しく交流するようになる。その体験がのちに、今日、彼の最も知られた作品となる『ブラックエルクは語る』*Black Elk Speaks* を生み出した⁷⁾。若い時代のヒンズー思想への共感は、インディアン・スー族の長老に「彼の心は自分たちと同じくらいスー族のものだ」⁸⁾と言わしめる心を育てたのである。

J. H. ハウスは、こうも語っている。

「彼はあらゆる意味でクリスチャンであったことは一度もなかったことは確かだ。しかし彼は、おおかたの人々よりもずっと深く、現実には生きてイエスが語った言葉を理解したのではないか、と思われる。彼は、何かの権威を媒介とせず、直接の体験を通して霊的な実体と関わり合おうと努力したのである。おそらく同世代の人々で、ナイハルトのように、靈感の源との親しい交流の感覚を持った者は、ほとんどいなかったであろう」⁹⁾。

4 「自然の織手」(THE WEAVERS)

成瀬文庫にあるナイハルトの本は、ニューヨークのマクミラン社から 1916 年に出版された *The Quest* 一冊のみである。これは、それ以前に出版した *A Bundle of Myrrh*（『一束の没薬』1907 年）、*Man-Song*（1909 年）、*The Stranger at the Gate*（1912 年）などの詩集から選んだ自選詩集である。

成瀬仁蔵が、どのような経緯で、当時（現在でも）ほとんど日本で無名のナイハルトを知り、その詩集を愛読することになったのかは不明である。成瀬は、ナイハルトの経歴や思想について、おそらく全く知らなかったであろう。しかし、上引のハウスが語るナイハルトの思想は、ほとんどそのまま、「山上の生活」を講ずる成瀬自身のものとも、思われる。偶然とは言え、この不思議な一致に驚かざるをえない。

成瀬は「山上の生活」第 4 講、「自念生活の領土（上）—内部を見よ—」で、「自然の織手」という詩を読み上げる¹⁰⁾。原詩は *The Stranger at the Gate* から自選された THE WEAVERS である。

第9講	山上に於ける結論会（上）	2
第10講	山上に於ける結論会（下）	7
		合計 13 編

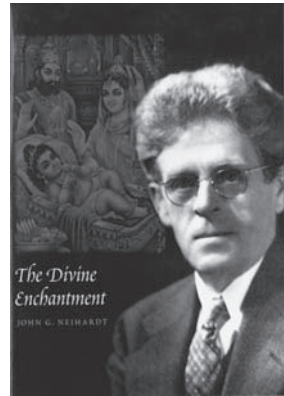
そもそも、成瀬の学生向け講話や著作の中で詩を読み上げたり紹介したりすることは、それまでほとんどなかった。その意味で、「山上の生活」において、このように多くの詩が紹介されたのは、例外的である。軽井沢の美しく清らかな自然の中で詩心が高められた、ということもあるであろうが、何よりも「山上の生活」において、理性を超えた感性の世界（成瀬の言う「自念生活の領土」）の重要性、感性的な世界への認識方法としての「瞑想」の意義が強調された、ということが大きい²⁾。成瀬は、詩を引用するに際して、「左に瞑想の心持を詩に依つて表されたものを掲げて参考に供せん」³⁾とか、「次の詩を玩味して瞑想の一助としよう」⁴⁾などと、述べているところにもそれが表れている。

3 ジョン・G・ナイハルト

13編の詩の作者はヴァン・ダイク（Henry van Dyke, 1852-1933）のほかにもう一人、ジョン・G・ナイハルト（John Gneisenau Neihardt, 1881-1973）である。引用された詩の作者はこの二人だけであり、第9講までの5編がナイハルト、第9講の2編目以下がすべてヴァン・ダイクである。そこで本号では、ナイハルトの詩についてのみ紹介する⁵⁾。

ナイハルトは1881年、イリノイ州に生まれた。父の祖先はドイツ・バイエルン地方から1737年にアメリカに移住した。ナイハルト10歳の時父が家出し、貧困の中で母親に育てられた。12歳ごろから詩人を志し、イリノイ州のほか、カンザス州、ミズーリ州、ネブラスカ州の各地を転々として育ち、のちにネブラスカ州から桂冠詩人の称号を授与され、大平原（Plains）の詩人と称されるようになった。

1900年、彼が19歳の時、最初に出版した詩集 *The Divine Enchantment*（『神の魅惑』）はヒンズー思想に基づくものである。このような詩集の刊行は、ピューリタニズムの強い影響下にあった当時のアメリカにおいては、極めて異端的な行為であり、彼は出版後、周囲の冷たく厳しい目にさらされて、そのほとんどを焼却処分してしまったと言う。しかしヒンズー思想は、その後も彼に深い影響を与えた。J. T. ハウスは1920年



ニューヨーク州立大学 2008 年復刻版 *The Divine Enchantment*。表紙はナイハルト

「軽井沢山上の生活」の詩について

—原詩を尋ねて— (上)

片桐 芳雄

1 はじめに

1917 (大正6) 年夏、軽井沢の日本女子大学三泉寮で、成瀬仁蔵校長によって行われた10回にわたる講義は、いわば、成瀬思想の集大成を学生たちに語ったものとして極めて重要である。この講義はその後、「軽井沢山上の生活」(以下必要に応じて「山上の生活」と記す)と称されるが、成瀬仁蔵は、この約1年半後、1919年3月4日に亡くなる。成瀬が学生たちに語った講義の記録として、これほどまとまったものは、これ以前にもあまりなく、これ以後にはない。

「軽井沢山上の生活」では、13編の詩が読み上げられるが、このうち4編はアメリカの詩人ヴァン・ダイクのものであることを、成瀬自ら明示している。しかし残る9編の作者は明らかではなかった。成瀬自作が4編あるとしたものもあるが¹⁾、後述の如くこれは誤りである。

筆者は、主として成瀬記念館所蔵の成瀬仁蔵旧蔵書(成瀬文庫)を調査し、13編すべての作者、典拠及びその原詩を明らかにすることができた。以下、本号と次号の2回に分けて報告する。

2 「山上の生活」と詩

10回にわたる「山上の生活」の講義題目とそこで読み上げられた詩の数を示すと次表のようになる。最後の方、特に、最終回に半数以上の7編が読まれていることが分かる。

	講義題目	読み上げられた詩の数
第1講	講義を始むる前に	
第2講	唯物論より唯心論に到りし経過及びその後の思想	
第3講	信念生活の経験(婦—またはその真髓)	
第4講	自念生活の領土(上)—内部を見よ—	2
第5講	自念生活の領土(下)—美の両極—	1
第6講	活動は人生の欲び—宇宙殿堂の建設者—	
第7講	愛の生活	1
第8講	活動を統御せよ	

成瀬記念館

二〇二二年度・活動の記録

二〇二二年度業務日誌

- も)、説明
- 5・8 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 11名及び教員1名見学、説明
- 5・10 文京ふるさと歴史館より19名見学
- 5・11 被服学科学生、授業で29名見学(分館も)。西生田記念室、教育学科学生授業で16名見学
- 5・12(土) 泉会定時総会につき延長開館、見学者45名
- 5・29 展示オープン(西生田)
- 5・31 全国大学史資料協議会東日本部会2012年度総会開催、53名見学(分館・講堂も)
- 6・8 文京ふるさと歴史館主催「第1回史跡めぐり」41名見学(分館・講堂も)
- 6・10(日)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者21名
- 6・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 12名見学、説明
- 6・15 展示オープン(目白)
- 6・16(土) 西生田記念室、中学校オープンスクールのため特別開室、見学者17名
- 6・19 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 14名及び教員1名見学、説明
- 成瀬記念館運営委員会(本年度第1回)
- 6・20 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 77名見学、説明
- 6・22 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 31名及び教員2名見学、説明
- 6・23(土) 成瀬仁蔵生誕記念日につき分館特別公開、説明、見学者53名
- 6・27 入学課から依頼の大学見学の保潔者(1校) 37名及び教員1名見学、説明
- 6・28 一貫教育研究会自校教育分科会で発表(岸本)
- 7・2 豊明小学校6年生39名見学
- 7・3 豊明小学校6年生40名見学
- 7・4 豊明小学校6年生37名見学。広報渉外課引率の職場体験の中学生2名来館。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 90名及び教員4名見学、説明
- 7・9 入学課から依頼の大学見学の高校生(3校) 77名及び教員6名見学、説明。
- 7・10 『成瀬記念館2012 No.27』(2千部) 納品
- 7・11 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 6名見学、説明
- 7・17 入学課、館内撮影のため来館。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 12名見学、説明
- 4・2 「新任職員の集い」参加者見学(成瀬記念講堂も)、主事他説明
- 4・3 西生田記念室、大学入学式につき開室、見学者47名
- 4・10 展示オープン(目白・西生田)
- 4・14(土) 桜楓会「ホームカミングデー」につき平常通り開館、見学者27名
- 4・20 西生田記念室、創立記念式典につき開室、見学者39名
- 4・21(土) シンポジウム「タゴールと日本女子大学」につき18時まで延長開館、見学者14名
- 4・27 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 10名及び教員1名見学、説明
- 5・2 附属中学校1年生239名見学(分館

- 7・21 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 18名自由見学
- 7・24 本年度当館受入れ予定の博物館実習生4名と事前打合せ
- 8・3 電動書架定期点検
- 8・4(土)「オーブンキャンパス」のため延長開館、見学者23名
- 8・5(日) 西生田記念室、「オーブンキャンパス」のため特別開室、見学者23名。「キャンパス見学ツアー」参加者に説明(11回実施)
- 8・16～8・21 博物館実習(被服学科1名、史学科2名、文化学科1名)
- 8・27～9・14 平成24年度アークイブズ・カレッジ資料管理学研修会(於 国文学研究資料館)参加(杉崎)
- 8・31 消防設備点検(講堂地下倉庫・分館も)
- 9・8 附属豊明幼稚園入園志願者説明会・附属中高説明会につき臨時開館、見学者29名
- 9・17(祝)「オーブンキャンパス」のため特別開館、見学者43名
- 9・21 展示オープン(目白・西生田)
- 9・24 煙蒸のため資料搬出(9・28終了、搬入)
- 9・26 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 40名自由見学
- 9・28～10・13 理学部開設20周年記念展と連携し、百年館ロビーに出張展示
- 10・2 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 43名及び教員2名自由見学
- 10・3 附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」の下見のため16名見学、説明(分館・講堂も)
- 10・4 防災訓練
- 10・6 家政理学科の卒業生12名見学。西生田記念室、十月祭につき特別開室、見学者38名
- 10・7(日) 西生田記念室、十月祭につき特別開室、見学者58名
- 10・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 82名自由見学
- 10・15 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 71名見学、説明
- 10・17 入学課から依頼の大学見学の高校生(2校) 42名見学、説明。附属中学校PTA「目白キャンパスめぐり」で71名見学(分館も)
- 10・18 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 5名見学、説明
- 10・20(土)～21(日) 目白祭につき平常通り開館、見学者合計429名。西生田記念室、日女祭につき平常通り開室、見学者合計93名
- 10・25 北九州市桜楓会員5名見学、説明(分館も)。入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 84名自由見学
- 10・27(土)～28(日) 西生田記念室、もみじ祭につき特別開室、見学者合計39名
- 10・30 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 12名見学、説明
- 11・8 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 22名自由見学。文京区文化財保護係、分館調査
- 11・12 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 11名見学、説明(休館日)
- 11・15 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 24名見学、説明
- 11・17(土) 西生田記念室、附属中学校説明会につき特別開館、見学者17名。神奈川県建築士会25名講堂見学、説明
- 11・20 入学課から依頼の大学見学の高校生(1校) 5名見学、説明
- 11・30 西生田講堂運用委員会に出席(岸

本)

12・1(土) 総合研究所研究発表会出席

(岸本・杉崎)。入学課から依頼の大学の見学の高校生(1校) 5名見学、説明(閉館後)

12・5~6 平成24年度女性情報アーキビ

スト養成研修入門(於 国立女性教育会館) 参加(高橋)

12・8(土) 「入試相談会」のため延長開

館、見学者42名。西生田記念室、「3大学知的探訪」開催、見学者47名

12・13 第82回全国大学史資料協議会東日

本部会研究会(於 東海大学湘南キャンパス)に参加(岸本・杉崎)

12・17 広報渉外課、学長の新年のごあいさつを撮影

12・20 文京ミューズフェスタ2012

(於 文京シビックセンター)に参加

1・7 上代タノ展DM(2千部) 納品

1・11 上代タノ展図録『故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す―上代タノ』(2千部) 納品

1・15 展示オープン(目白)。上代タノ

展DVD納品

1・26 西生田記念室、附属豊明小学校音

楽会(於 西生田成瀬講堂)につき特別

開室、見学者61名

1・29 展示オープン(西生田)

1・30 総合研究所研究課題47公開研究会「成瀬仁藏研究文献目録データベースデモンストレーション」開催

2・1~3 入試期間中11時より14時の間、

受験生付添者見学につき臨時開館、見学者合計75名

2・16(土) 西生田記念室、附属中学校新

入生保護者会につき臨時開室、見学者98名

2・27 消防設備点検(分館)

2・28 テレビ朝日「夏目記念日」収録

3・1 高根県雲南市より「大東町の女性の集い」メンバーほか14名、上代タノ展

見学のため来館。消防設備点検

3・4 創立者命日につき特別開館、見学者21名

3・13 電動書架定期点検。テレビ朝日

「夏目記念日収録」

3・19 展示オープン(西生田記念室)

3・20 西生田記念室、大学卒業式のため特別開室、見学者55名。テレビ朝日「夏

目記念日」収録

3・30(土)「オープンキャンパス」のため特別開館、見学者71名

二〇一二年成瀬記念館運営委員

蟻川芳子館長(学長)、石川孝重家政学

部長、清水康行文学部長/成瀬記念館担

当理事、飯長喜一郎人間社会学部長、今

市涼子理学部長、河上清子家政学部通信

教育課程長、竹内龍人教養特別講義1委

員会委員長、峰村勝弘教養特別講義2委

員会委員長、島崎恒藏図書館長、三神和

子総合研究所所長、岩田正美現代女性

キャリア研究所所長、高頭麻子生涯学習

センター所長、若林元常務理事、小山高

正附属中高担当理事(副学長)、岩崎洋子

附属幼小担当理事(副学長)、後藤祥子

桜楓会理事長、吉良芳恵成瀬記念館主事

二〇一二年成瀬記念館構成メンバー

館長・蟻川芳子、主事・吉良芳恵、館

員・岸本美香子(主任)、杉崎友美、非

常勤・梅原裕香、大門泰子、大谷美枝子、

加藤きよみ、木村優子(11月1日より)、

佐久間妙美、高橋末沙、長尾順子、山本

文字

博物館実習

二〇一二年年度の博物館実習(第三三回)

は、八月一六日(木)から二三日(木)までの六日間の日程で行った。実習生は、被服学科一名、史学科二名、文化学科一名で、企画展「目白の理系女子物語」・「高村智恵子紙絵写真展」の準備に参加した。

実習生は、本学創立当初からの自然科学教育について資料を調査し、解説パネルや年表を作成した。このほか、展示作業等の学芸員の基本的な業務を体験した。

業務統計

開館日数 目白 一八五日、

西生田 一四七日

入館者数 目白 約六二〇〇人

西生田 約二〇〇〇人

資料提供

学園史関係質問受付および資料提供

一〇九件

出版・映像のための資料提供

二五件

その他

『成瀬記念館二〇一二』二七号の発行 二〇〇〇部

『日本女子大学史資料集第五―(五) 日本女子大学校規則 大正九年―十二年』の発行 一五〇部

成瀬記念館展示のご案内(二〇一三年度)の制作 三〇〇〇部

『故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す 上代タノ』の発行 二〇〇〇部

DVD『故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す 上代タノ』の制作

研修等参加(研修・平成二四年度アーカイブズ・カレッジ資料管理学研修会、平成二四年度女性情報アーキビスト養成研修(入門)、研究会・第八二回全国大学史資料協議会東日本部会研究会、総合研究所研究発表会、総合研究所研究課題四七公開研究会開催、その他・文京ミュージズネット、展示見学など)

資料の収集・整理・保存・媒体変換

二〇一二年年度展示一覧

〔成瀬記念館(目白)〕

4・10〜6・9

シリーズ「天職に生きる」―

成瀬仁蔵と自然科学教育」展

6・15〜7・31

「軽井沢夏季寮の生活」―

軽井沢いまむかし」展

9・21〜12・22

「理学部開設20周年記念」―

目白の理系女子物語」展

1・15〜3・2

「故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す」―

上代タノ展」

〔西生田記念室〕

4・10〜5・22

シリーズ「天職に生きる」―

成瀬仁蔵と長州の男たち」展

5・29〜7・31

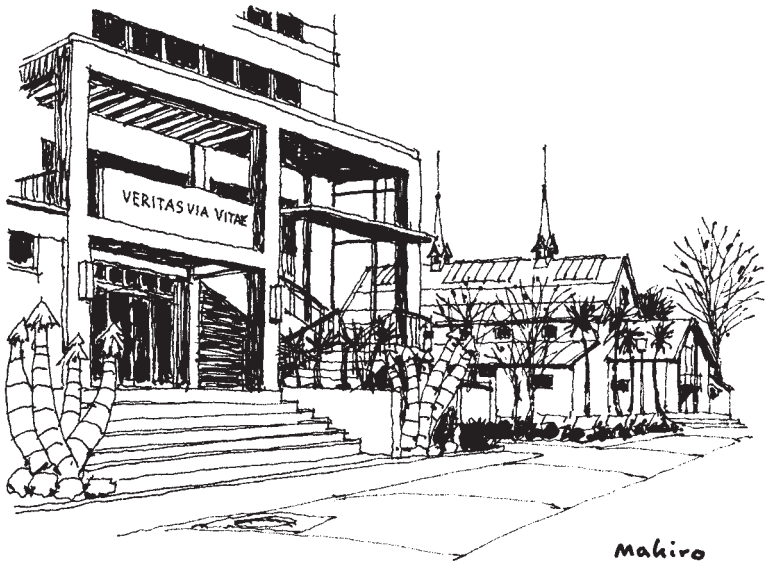
「軽井沢夏季寮の生活」―

軽井沢いまむかし」展

9・21〜12・21

「高村智恵子紙絵写真展」

1・29
3・1
「日本女子大学のおひなさま」展



展示の記録(二〇二二年度)

●成瀬記念館(自白)

「シリーズ“天職に生きる” 成瀬仁蔵と自然科学教育」展 2012.4.10(火)～6.9(土)



創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。今回は本学の自然科学教育に焦点を当て、成瀬が理科教育のため招聘した長井長義について取り上げた。

長井長義は一八四五(弘化二)年に徳島藩に生まれ、ベルリン大学に留学し博士号を取得、帰国後は東京帝国大学教授に就任

し、気管支喘息の治療薬の一つであるエフェドリンを発見した人物である。本学創立当初から家政学部で非常勤教授として「応用理化」を担当した。

本展では、長井の書や『家庭週報』に掲載された「家庭化学講話」、成瀬宛ての書簡等を展示した。また徳島大学薬学部からご提供いただいた若き日の長井や、妻テレーゼの写真を展示した。

「軽井沢夏季寮の生活 軽井沢いまむかし」展 (自白)2012.6.15(金)～7.31(火)、 および8.4・9・16・23・30 (西生田)5.29(火)～7.31(火)、および8.5



軽井沢夏季寮についての理解を深めるためのシリーズ展示。今回のテーマは、軽井沢の歴史と軽井沢を舞台にした小説を書いた文化人。

軽井沢の避暑地としての歴史は、一八八六(明治一九)年夏、イギリス人宣教師A・C・シヨーと帝国大学文科講師ディクソンが軽井沢を訪れたことに始まる。その後、文化人が軽井沢を訪れ、軽井沢を舞台にした作品を数多く執筆したことにより、その名が広く紹介されることになった。

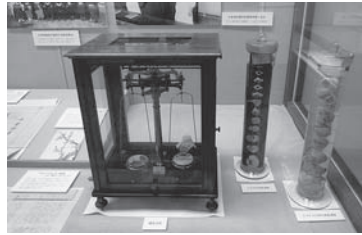
本展では、明治時代の軽井沢大通りや三笠ホテル、万平ホテル等の写真とともに、室生犀星・正宗白鳥・芥川龍之介・川端康成・堀辰雄・有島武郎・網野菊の作品を紹介した。また、教特1で軽井沢を訪れる学生に楽しんでもらえるよう、軽井沢の観光地の紹介やパンフレットも展示した。



網野菊

1920(大正9)年 英文学部卒業
『さくらの花』『ゆるる葦』など

「理学部開設 20 周年記念
一目白の理系女子物語」展
(目白)2012.9.17(月・祝)、
9.21(金)～12.22(土)



理学部開設二〇周年を記念して、「一目白の理系女子物語」を開催した。女性科学者の先駆者として丹下ウメ、大橋広、鈴木ひでるを、続いて初期自然科学教育を受け継いだ後継者として奥田富子、河上さわ、高橋憲子、道喜美代、辻キヨ、館岡孝、竹中はる子を紹介した。

本展では理学部長、数物科学科・物質生
物科学科の学科長をはじめとして、理学部
の先生方に全面的にご協力いただき、展示
資料として「学科紹介パネル」を一〇枚、
精密天秤、植物標本、計算尺、DNA模型、



「キュリー夫人パネル展」成瀬記念館会議室

オシロスコープ、電位差計等をご提供いた
だいた。また、理学部卒業生七名に「理学
部開設二〇周年」へのコメントをいただき
パネルにして展示した。

なお、この展示では博物館実習生が解説
パネルの一部を作成した。

また百年館高層棟ロビーには、オースト
リア製の解剖図八枚を展示。さらにポーラ
ンド大使館の協力のもと「キュリー夫人パ
ネル展」を同時開催した。

「故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す
—上代タノ展」

2013.1.15(火)～3.2(土)



タノのワンピース



図録の表紙

本展では、本学第六代学長上代タノにつ
いて「幼少期」「日本女子大学校在学時代」
「留学」「教育者として」「平和運動」「社会
的活動」という側面から紹介。

成瀬や新渡戸稲造との交流がうかがえる
書簡や自筆の原稿、ワンピースや鞆等の身
の回りの品や、受賞した数々の勲章等を展
示した。併せてタノの生涯を紹介するDV
Dも制作した。この展示に際して、図書館
友の会の方々にご協力いただいた。

「シリーズ“天職に生きる”
成瀬仁蔵と「長州の男たち」展
2012.4.10(火)～5.22(火)



創立者成瀬仁蔵の生き方を様々な切り口から紹介するシリーズ展示。

今回は、成瀬を女子高等教育機関の必要性に目覚めさせた澤山保羅や、女子大学校設立運動の最初の支援者となった内海忠勝、同じく協力者となった時の総理大臣伊藤博文や山縣有朋が、成瀬と同じ長州出身であったことに焦点を当て、写真や書簡、肖像画などを展示した。

「高村智恵子紙絵写真展」
2012.9.21(金)～12.21(金)



うさぎの餅撞き

高村智恵子は本学家政学部四回生で、卒業後も『家庭週報』の挿絵を描くなど、本学と親交をもっていた。智恵子の夫の高村光太郎は成瀬仁蔵胸像の作者である。そうした縁から、当館では光太郎の甥にあたる写真家・高村規氏から、ご寄贈頂いた智恵子の紙絵の写真複製を所蔵している。今回は、「自然」、「生き物」、「日常生活」、「野菜と果物」の四部構成で、全五十点の内四十点を展示し、併せて直筆の書簡などを展示し、本学と高村智恵子の関係を紹介した。

「日本女子大学のおひなさま」
2013.1.29(火)～3.1(金)



毎年、雛祭りの季節にあわせて開催。日本女子大学の学寮や、卒業生宅などで大切に飾られてきた明治・大正・昭和の雛人形を展示している。

七段飾りや市松人形、屏風のほか、今回は雛飾り以外の人形類や家政学部の授業でとりあげられた、ひなまつりのごちそうノートなどを紹介した。

今年も学園関係者のほか地域の方々など多くの見学者が訪れた。

資料寄贈のお願い

成瀬記念館では、学園史資料のご寄贈をお願いしております。手放しても良いと思われる資料がございましたら、ご一報ください。

- 卒業アルバム
 - 旧制日本女子大学校（全回生）
 - 附属高等女学校（全回生）
 - 新制日本女子大学（1950～1962）
 - 附属高等学校（1948～1995）
 - 附属中学校（1948～1954）
 - 附属豊明小学校
 - 附属豊明幼稚園
- 本学関係の写真
- 卒業証書
- 校章、バッジ類
- 記念品
- 学生証、生徒手帳
- 夏季寮のしおり、遠足・修学旅行等のしおり
- 行事のプログラム（運動会・音楽会・入学式・卒業式 等）
- 実践倫理ノート
- 各種名簿

- 学寮の記録、物品 等
- 附属機関の記録、物品 等
- その他事務文書、物品 等

- 成瀬仁蔵関係資料

本学と関係のないものはお引き受けできませんが、迷われた場合はお気軽にご相談ください。

☎03-5981-3376

e-mail: kinenkan@atlas.jwu.ac.jp

■成瀬記念館より

昨年度は、念願の企画展示「故郷を愛す、国を愛す、世界を愛す―上代タノ」を開催することができ、あわせて上代タノ先生の軌跡を展示図録として刊行いたしました。

図録の表紙には、故浮田克躬氏による肖像画「上代タノ先生」を掲載しましたが、その理由は、何よりもこの肖像画が、先生の存在感や温かい人間性をもし出しており、最もふさわしいと考えたからです。先生が戦後、世界平和アピール七人委員会の委員や原水爆禁止署名運動の世話人などをつとめられ、生涯を通じて平和運動に携わられたことは、本学の誇りです。また学長時代、他大学に先駆けて、開架式で個人スペースを重視した図書館を建設されるなど、その先見性を示されたことも特筆に値すると思います。こうした姿勢は、二度の留学やその後の欧米視察など、豊富な経験によって培われたものにちがいありません。

なお展示をご覧になれなかった方で、展示図録をご希望の方は、成瀬記念館までご連絡を頂ければ幸いです。

(吉良)

一月の「上代タノ展」開催に合わせて、DVDを制作しました。上代先生の故郷島根県の大東町の皆様が作られたDVDに刺激を受け、制作に踏み切りました。戦前の上代先生の貴重な映像も取り込むことができました。これに気を良くして、現在、取り壊しが予定されている旧成瀬仁蔵住宅を紹介するDVDを制作中です。

(岸本)

国文学研究資料館主催のアーカイブズ・カレッジ（資料管理学研修会）後期を受講し、2年にわたる研修を修了しました。カレッジでは資料の整理、保存、修復方法を学び、またさまざまな立場の方と出会うことができました。今後は学んだ知識を実践で活かせるよう、努力していきたいと思っています。

(杉崎)

「上代タノ展」の図録制作に携わりました。何もかもが初めての経験で、とまどうことが多かったのですが、皆様と力をあわせて、やり遂げることができました。図録が無事に完成したときの喜びはとても大きく、忘れられないものになりました。これからも、さらに進歩できるように一層努力してまいります。

(高橋)

成瀬記念館 2013 No. 28

二〇一三年七月五日

編集・発行

日本女子大学成瀬記念館

〒112-8681

東京都文京区目白台二丁目一

電話（〇三）五九八一―三三七六

FAX（〇三）五九八一―三三七八

印刷

開成出版株式会社

〒101-0052

東京都千代田区神田小川町

三―二六一―四

※無断転載、複製はご遠慮ください



日本女子大学
成瀬記念館

表紙は、上の校章を模して製作された記念館
スタンドグラスをデザインしたものである。